

《翻訳》

二百周年以降のフランス革命研究の状況

ピエール・セルナ (Pierre Serna)

パリ第一大学教授・フランス革命史研究所長

山 崎 耕 一

はじめに

最初にフランスにおける研究史と日本のそれとのつながりの古さを指摘しておくべきでしょう。そのことは、1960年にルフェーヴル教授に捧げられた高橋幸八郎氏の論文がみごとに示しております¹⁾。当時は、まず農業革命の規模を問う点において、ついでブルジョワ革命という概念を問題にする点において（日本側では、明治維新の現実にあてはめて考えることに熱心だったわけですが）、日仏の研究者はとても近い立場にありました。その後、研究は進展し、多様化しました。地域研究、思想研究、急進性の様態、知識人の歴史などです。現在においては、日仏のつながりはまだ存在しますが、フランス革命史研究が弱体化していることは認めざるを得ません。その点を認識し、その現象について考察する必要があります。

世界が、要するに、それほど革命的ではなくなり、より改良主義的になったからでしょう。また歴史の描き方が変わり、断絶面を見るよりもグローバリゼーションという現象を理解する方に進んだからでもあります。例えばアメリカ合衆国においては18世紀ヨーロッパ史の講座よりもインド史・中国史の講座が優先されています。世界史はこれまでとは異なった見方をされるようになったのです。

同様に、パラダイム・モデルも変化し、思想や支配の様式の単一化が進んだため、個々の国や社会の独自性を認識する余地が少なくなっているのです。2000年から2020年については西洋対イスラムの対決が、21世紀のその後についてはアメリカ合衆国対中国の対決が、地球規模で準備すべき問題となった結果、フランス社会や日本社会のように多少とも風変わりで多少とも独自性を持ち、多少とも独自の歴史的伝統の上に成り立っている社会は場を与えられなくなってきています。日仏両国は、知的および文化的な面において強いインパクトを持ち、相互に評価し合っているわけですが、上記の条件の中では、現在の文明での位置取りや参考対象としては、二次的な地位に追いやられています。フランス革命の特性と明治維新の個性、と言いますのはつまり、人権宣言のメッセージの普遍性と、それに対する明治維新の地域的・様相的な個性ですが、これら二つは、その結果においてはまったく異なっていますが、その起源においては類似の面があります。まさにそれ故に、現在のフランスと日本は考察の対象となるモデルたりえなくなっているように、私には思われます。それは、これら二つの変革が概念的に貧しいからではなく、正反対に、支配的モデルと対立し、転覆するという断絶面での役割を果たしたからなのです。

日仏両国のケースに関して、私は「トクヴィルの」な視点を参照すべきだと思います。両国は過去と根本的に決別する強烈な革命をフランスは1789年から1799年の間に、日本においては1868年から1889年に経験しましたが、過去を完全に根こそぎにすることは結局不可能でした。過去の本質的要因は抵抗し、作り替えられ、異なったやり方で執拗に再提案されました。そして、それらは二度の世界大戦において、特に第二次大戦期の権威主義的で軍国的な体制において、顕著に表れたのです。

以上のようなまとめに付け加えて、とりわけ、革命200周年にソルボンヌで開催された研究集会において日本での研究の見取り図を示された、柴田三千雄氏と遅塚忠躬氏（東京）、西川長夫氏（京都）、中川久定氏（京都）、樋口陽一氏（東京）の業績を挙げるべきでしょう²⁾。私は個人的には、山崎耕一氏の研究を何度

か参照しました。同氏の『B. バレールのモンテスキュー頌³⁾』は、私が『フランス革命史年報』に掲載した *Barère, penseur et acteur d'un premier opportunisme républicain face au Directoire exécutif*⁴⁾ という論文を執筆する際に大変役立ちました。また最近、革命の急進性について研究する必要があった際に、高橋誠教授のフランソワ・ボワセルについての研究⁵⁾の重要性を発見しました。こうしたことのすべては、いかなれば、日本におけるフランス革命研究が200周年前後に、いかに躍動的であったかを示しております。

以上の指摘は、逆説的ながら、なぜ日仏両国において1989年が現実問題においても歴史学においても転換点であったかを明らかにしてくれるものなのです。両国は、一種の頂点に立った時に、もっとも脆くなっていたのです。1988年は日本の貿易の頂点でもありました。それによって日本は、金融と貿易における支配権をめざして戦う競争者となったのですが、そのことが逆説的に日本を脆くすることになりました。200周年の年である1989年は、人権の革命という理念が頂点に達しましたが、ベルリンの壁の崩壊によって、この理念はかなり曖昧なものになりました。これは、自由は他のすべてよりも強いことを示したのでしょうか。それとも1789年の革命が、研究史において1917年の革命に結び付けられていたわけですが、決定的な失敗であったことの証拠なのでしょうか。この時以降、フランス革命にはどのような意味・方向が与えられるのでしょうか。つまり、フランス革命をめぐるどのようなタイプの研究が形成されるのでしょうか。

問題をはっきりさせましょう。どのような疑問が革命に対して、日本および西洋における現在の私たちの歴史学に関係あるものとして、投げかけられるのでしょうか。認識論的および地政学的に2つの種類の問題が革命に対して向けられるように思われます。第一はフランス革命に内在する力学の問題ですが、この問題は私たちをフランス革命自体から次第に遠ざけ、革命をわかりづらくしています。この問題は、革命の10年間における出来事の流れから離れて、その前後のふたつの時期に関心を集中させ、私たちに「いかにして革命は始まるのか」および「いかにして革命は終わるのか」と問うのです。

最初の疑問は、これからは18世紀を抜きにして1789年を考えるのは不可能であることを示しています。1787年以来の、さらには啓蒙専制主義を作ろうとして失敗した試み、すなわちルイ15世が1770年から1774年にかけて試みて失敗した、あの行政的君主制以来の出来事の流れを理解するためには、君主制の状態や改革に絶えず立ち戻らなければならないのです。

2番目の疑問は、同時代人のものでもあった強迫観念、すなわち進行しつつある過程をいかにして停止させるか、過激派や反革命派のために左や右に寄り過ぎることなく、成果を守って、過程をいかに沈静化させるかという関心に関わっています。

かなりの研究がこれら二つの分野で進行してきました。二人の歴史家、すなわちティモシー・タケットとプロニスラフ・バチコがそれぞれの中心になりましたが、一人はアメリカ人、もう一人はポーランド人です。フランス研究の幸福な国際化を示すものと言えるでしょうか。

これら二つの疑問は、革命の核心に触れる別の面についても問題を誘発します。その国際的な将来はいかなるものだろうかという問題です。私が言いたいのは、グローバリゼーションが21世紀初頭を印づけているように思われる時において、普遍性を標榜するフランス革命は私たちに何を示すだろうかということです。共和制は世界的な制度でしょうか。もしそうなら、テロリズムは反革命であり、ビン・ラディンは21世紀のシューアンになるのでしょうか。そして対案や自律を求める運動は現代における一種のバブーフ主義でしょうか。

こうした包括的な問いかけは、歴史家がまじめに取り上げるものとなるには、すなわち過去について私たちが持っている正確で厳密な知識に基づくものであるためには、近年に取り上げられるようになり、新たな展望のもとで光が当てられているいくつかの考察テーマをはっきりさせる必要があるでしょう。

I 革命の文化的・政治的起源：最近20年の主要成果

a 『フランス革命の文化的起源』

ロジェ・シャルチエの『フランス革命の文化的起源⁶⁾』によって始められた議論の重要性を、まず念頭におかなければなりません。やや図式的ではありますが、何人かの人はこの著作の主要な寄与に、多くの点で、非常に魅力的な命題を認めました。「フランス革命が啓蒙思想を発明した」というものです。これはどういう意味でしょうか。

フランス革命は、自らを思想的・文化的に正当化しようという意思をもって、過去からの継承を考え、自らをある一つの哲学の論理的で不可避な、そしてなかなかずっと合理的な到達点であるとみなしました。その哲学は進歩、功利性、理性への信仰、人間の完成可能性、宗教的寛容の要求、恣意性への戦い、教会権力の世俗的形態への闘争をみずからの課題の中心とするものでした。こうして憲法制定議会、ついで立法議会と国民公会の議員たちは、自分たちが栄えある歴史の過程を担うものであると位置付けました。なぜなら彼らだけが、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、デイドロのような人々の哲学的主張を政治の用語に移し替えることができたからです⁷⁾。

厳粛な舞台装置や死せる偉人の礼拝が、すべての市民の目に、この見栄えのいい類縁関係を具体化するべく用いられました。時には過去の改ざんすら行われたのであって、ヴォルテールとルソーがはっきりと感情的に憎悪し合い、二人の仲が引き裂かれていたのは歴史的な事実として隠しようがないのに、二人が一緒に牧歌的に散歩をするという民衆画が描かれたりしたのでした。

これが、フランス革命が啓蒙思想に用意した目的論的な読解でした。しかし、ロジェ・シャルチエの魅力的で革新的な研究は、それに留まるものではありません。いずれにせよ、この革新的な著作をこの一つの命題に還元できはしないのです。

なぜならこの業績全体—「公共空間と世論」(第2章)、「非キリスト教化と世俗化」(第5章)、「非神聖化された国王」(第6章)、「新しい政治文化」(第7章)—は、思想運動が1750年代に手に入れた文化的手段を用いて、王権装置の全体、絶

対君主制の上から下まで全部に対して行なう転覆工作や小刻みな攻撃を、いかなる疑いの余地もなく、示しているからです。

文化史の専門家であるロジェ・シャルチエは、アンシアン・レジームの、マルクスの用語でなら上部構造の浸食とでも呼べるものがどのようなものであったのかを示しています。1770年以降のフランスを襲い、諸制度の転覆の主要因のひとつとなった経済危機の諸条件は、本質的なものではありませんが、それを解明するだけでは十分ではありません。君主制の諸基盤に対する筋の通った攻撃がなければ、反乱は、いかに激しくても、革命の波になることはなかったはずで。

実際、革命という現象の特性は、危機の測定し得る側面での深刻さというよりは（政治とはまさに永続的な危機の管理です）、ある時点において危機を公式化する可能性に依拠します。その際に危機は、取り巻く環境の、敵対的ではあっても一過性の異常な状況（世界市場、天候不順、イギリスとの競争など）としてではなく、政治・社会・経済のシステムに内在するものに起因し、それがあらゆる機能障害の原因であると公式化されるのです。この単純な真理を言明することがシャルチエの業績の核心をなしており、彼が基本的に問題にしたものを理解させるのです。

フランス革命の前史は、誰であろうと本来は権力を支えるはずのエリートが分離することによってのみ、可能となります。言い換えれば、国家のイデオロギー装置（1789年のフランスにおいては、政治制度の支柱として3つを挙げることができますが、それらはヨーロッパ全体での支柱でもあります。すなわち1に執行権を内包する国王の絶対権力、2に神聖な本質を持つ君主制とその聖職者とのつながり、3に貴族の優越にもとづく不平等な社会構造です）の風化が不可避免的に革命のできごとと先行しました。

エリートが分離し、彼らの中に君主制の基盤とは分裂する文化が形成されたことは、フランス革命を理解するための基本的な一段階となります（この主題をアメリカ革命に広げるなら、この植民地においても1770年代における反乱の動きの開始におけるエリートの役割が見られるでしょう）。

シャルチエが真に問いかけたのは、啓蒙思想がフランス革命を導く力を持つのは不可避だったということよりも、むしろフランス革命はより混乱していると同時ににより一貫していたということです。君主制の秩序は、もっとも影響力があってもっとも卓越した諸グループに支えられており、これらのグループは、自分たちの特権の維持が王権の安定性に依拠していたのに、またその威信と財産、社会的高位のおかげで最良の文筆家と最良の頭脳を自らのために使役することができたのに、なぜ、そしていかにして、勝てるはずだった戦いに敗北を喫したのでしょうか。

シャルチエの問いかけの核心は、以下の問いです。思考力に富んだエリートは、なぜある時点で自分たちの繁栄をもたらした諸制度から分離し、社会構造そのものを危険にさらすような分裂を引き受けたのでしょうか。

このように見れば、革命家たちが懸念していたことも、またシャルチエの命題をフランス革命と啓蒙思想は無関係であるという点に還元しようとするやり方も理解できます。すなわちシャルチエの問題設定は、もっとずっと複雑だったのであって、フランス革命は別物であり得た（あるべきだった？）と解釈できるからです。啓蒙思想の動きは単一ではなかったし、フランス革命という単一の出口しかなかったわけでもありません。しかし、錯綜していた思想の中で、革命の動きに意味と方向を与えることを余儀なくされた人たちが、啓蒙思想のヴィジョンを構成し、革命の動きを正当化せざるを得なくなった。そして革命以外の解決策の可能性や、啓蒙思想の文化が孕んでいた君主制と根本的に決別するための別の可能性は、どれも顧みられなかったのです。

この意味では、シャルチエを誤読していなければ、啓蒙思想は「数多くの」革命を準備していた、そして諸事件によって導き出された一つの革命が自らを、考え得る唯一の道であるとして、急いで自己正当化したわけです。この自己正当化は受け入れにくいものかも知れませんが、歴史家としては結局のところ、この道をたどらざるを得ないのです。シャルチエの批判は有益なもののですが、フランス革命の実証的な歴史を危機にさらすのでなければ、「もう一つ別のフランス革命」

が実現したかのようにふるまうことはできないからです。と言いますのも、容易におわかりでしょうが、シャルチエのテキストをこのように都合よく読み取る背景には（ロジェ・シャルチエは個人的には、啓蒙思想とフランス革命を結ぶ思想的操作、基本的に人文主義的な思想をあのような暴力の爆発に結ぶ様式を示していますが）、暗黙のうちに、自由主義的な革命、もう一つの（イギリスの）革命のように、暴力を伴わないが故に「名誉ある」革命の夢が思い描かれているのです。結構でしょう！しかし、このような革命は起こりませんでした（イギリスでだって、これだけが起こったわけではありません。なぜなら1688年は1640年から1660年にかけての暴力の到達点だからです。またロベスピエールが唱えた徳の支配も、動かしがたい現実には照らせば、起こりませんでした。さらに言えば、上のような姿勢は、問題を別の空間に移して、たとえばイギリスにおいては革命はなぜ18世紀末に起こらなかったのかと考えることを、我々に余儀なくさせます）。

イギリスでは、この国の歴史家が示しているように、できあがっている形での君主制に関してエリートたちの合意がありました。国王への奉仕、個人的利害、君主制の海洋国家によって保障される資本主義的グローバリゼーションの形成の相互浸透は、イギリス国家の頂点におけるエリートたちの目標の共有によって、手厳しい批判、と言うよりはむしろ手厳しい批判ができる表現手段があったにもかかわらず、絶えず強化されていました。さらには、英仏海峡の向こう側においては世論が形作られており、緊張を解くための有益な安全弁として広範に用いられていたことも見ておくべきでしょう。

これら2点こそが、フランス革命の文化的起源にありました。エリートは自分たちの同意もしくは不同意を表現する文化的手段を何も持たなかったのです。政治新聞の欠如と議会の不在は、エリートと君主制の分裂に重くのしかかり、明らかに双方の立場を急進化させたのであって、相互理解をめざすためには、非合法的もしくは不敬な手段を利用して異議申し立てをするか、意見の分裂を率直に言明するかせざるを得ませんでした。具体的には、政治新聞や議会のような世論表明の場を欠いていたので、生まれて来ている世論は別の場で形成されざるを得ず、

それが君主制には致命的になったのです。これが、シャルチエの業績における基本的な考察軸です。

b 世論の誕生

世論（公共の意見 *opinion publique*）というのは、その名が示す通り、一つの場、現実のものであれ比喩的なものであれ、一つの公共広場を自由に使うことを含意します。この点では、サロンは内輪で公共の問題を討論する私的な場でしかあり得ません。君主制の構造が押し付ける強制によって変形させられてしまって、私的な場が公共の場となり、その結果秩序を確保すべき力によってはまったくコントロールされないものになりました（同じ問題は、ウィーンでフリーメーソンのロッジに相對したジョゼフ2世についても生じます）。孤独で沈黙の実践である読書は、集団的で声を出して行われるものになります。異議申し立てのための社会結合が生まれますが、革命が目的ではありませんから革命などなにも想定しておらず、さらにいえば活動をめざした精神的空間ですらないのですが、サロンの3つの世代、すなわち1740年－1755年、1755年－1770年、1770年－1785年と進むにつれて、特権層の社会的ハビトゥスにもかかわらず、君主制の諸基盤と完全に分裂する政治的表現を露わにするようになります（1777年に死んだジョフラン夫人や1776年に没したレスピナス嬢のサロンは、ネッケル夫人やマルシェ夫人のサロンによって引き継がれ、重農主義者を迎え入れていたことを、ここで想起すべきでしょう）。こうして、エルヴェシウスの唯物論は哲学的立場以上のものになり、君主制の神聖さを拒否することを告げるものとなったのです。同様に、アメリカのシンシナティ協会⁸⁾に対するミラボーの攻撃は、不平等が社会的再生産を保証するような社会への拒否の表現でした。また同様に、1770年以降の政治的ジャンセニストによる王権の自由裁量に対する批判は、国王個人から発する権威の源泉に対する拒否を過激化させたのでした⁹⁾。

私的な出来事はそもそも匿名なものですが、そこにおいても裁判制度に対する厳しい批判の余地が生まれました。判決は弁護士によってパンフレットのかたち

でコメントされ、判事の決定を告発し、批判を高等法院全体へと広げました。高等法院は、その売官制、遅滞ぶり、無能力、さらには腐敗のかどで攻撃されたのです。サラ・メイザはアメリカの歴史家で、このパンフレット類を研究したのですが、彼女によりますとこの数千ページに及ぶ文書は、単に個々の訴訟について長々と論じるのみならず、すぐれて王権のもう一つの大権である裁判に対する正真正銘の批判の論壇となっているのです。裁判は次第に、腐敗していて根本的な改革を必要としているとみなされ、ルイ16世のイメージに重ねられました。というのもルイ16世は、その統治の開始の時から、高等法院の改革を続けたり展開したりすることができなかったからです¹⁰⁾。

同様にパオロ・ヴィオラは『アンシアン＝レジームの崩壊』において、王権の諸制度がこうむっていた批判を再び取り上げました。1400年続いた体制が崩壊する早さは、1789年の諸事件よりも前に構造に亀裂が走っていたのではないかという問いかけを余儀なくさせます。このイタリアの歴史家によれば、批判のやりとりや論争、妥協などを通じて権力がエリートと政治的討論を切り結ぶことが不可能であったために、世論が生まれて、それが社会のより広い面を次第に強力に揺り動かしていくというような複雑な現象に直面して、君主制はあまりにも硬直してしまっていたのです。1789年夏の諸事件は、ヴィオラによれば、公共の問題の管理に新たな要因が闖入してきたことに還元できるものではなく、世論の誕生と不可分の民主化現象に連なるものなのです¹¹⁾。

シャルチエの著作は、サラ・メイザやデイル・ヴァン・クレイ、パオロ・ヴィオラによってそれぞれに異なるやり方で継承された結果、啓蒙思想とフランス革命のあまりにも単純なつながりを一掃した後で、エリートが君主制の形態と分離したことがフランス革命の勃発と不可分のつながりを持つことを示しているのです。(もっとも、こうした文化の様式と諸事件が展開するやり方の間に、つながりがあると主張するものではありません。その意味では、マルクス主義の影響を受けたいわゆる古典的な歴史学や批判的な歴史学を揶揄するものです。というのも後者の歴史学においては出来事は必然だからです。また社会的・経済的重要性

によって動かされる因果性によって決定されるものでもなければ、政治的エリート
の関心のみによって突き動かされるものでもなく、いくつもの一連の可能性があ
るのであって、それ故に革命の真の主要人物となった人々にとっても明日は予見
しがたいものなのであり、だからこそ革命研究は面白いものとなるのです。)

革命前の民衆文化を取り上げることが可能でしょうか。陳情書の場合を見ま
しょう。文化的なものと、その政治的なものとのつながりに関しては、フィリッ
プ・グラトーの『陳情書、文化的再読¹²⁾』を見るべきです。ジョン・マーコフや
ギルバート・シャピロによって行われた研究¹³⁾の定量的な側面を超えて、著者の
グラトーは定性的なアプローチを提唱しています。1789年におけるフランスの大
衆の文化について、何がわかっているのでしょうか。農民の多くはどのように自
分自身を見ており、またどのように見られたいと思っていたのでしょうか。こう
した疑問はどのようにして、広い意味での政治文化の一面を構成するものでしょ
うか。言い換えますと、1789年前夜において農民は、日常生活を通じて、どのよ
うに政治問題を理解し、受け入れていたのでしょうか。その政治問題はエリートが
前もって、農民とは異なるやり方で定式化したものですが、今日では陳情書を起
草するための集会によって生じた新たな諸条件での討論と結びつくことになった
のです。

ダニエル・ロッシュが前書きで指摘しているように、声なき大衆を語らしめよ
うとする地方エリートによって民衆の語りは操作されているだけだと繰り返すよ
うな、気の抜けた読解をしてはなりません。そこには「農民世界についての、ま
たその政治文化や知的文化についての表現、生活のあらゆる分野と、とりわけ物
質文化の分野に生じた長期の動きの結果である変容と願望についての、農民世界
による熟慮された表現」があるのです。

都市での抽象的な要求や首都の政治的討論が、どのようにして地域レベルに
浸透し、移し替えられるのか、そして地域での紛争や緊張に応じて再解釈される
のかを測定するのは、興味深いことです。ピレネー・オリアantal県のクストウ
ージュの住民は「臣下は社会契約によって一致している」と断言しています。シ

ャンパーニュ地方のサン＝プリスの住民は、より共同体主義的で伝統的であり、「臣下は王国において単一の家族を構成しなければならない」と言明しています。この種の文書からどのようにしたら、1789年の理念についての大きな議論に共同体が関わっているレヴェルを再構成できるでしょうか。

確かに国王は批判されておりませんし、ここでは政治・ポルノグラフィ的文学（リベルタン文学と政治批判の考察を結び付け、18世紀に栄えた特殊なジャンル）は農村部を荒廃させてはいません。しかしながら国王への熱意は常に、国王と国民の新たな関係を求める意識的な要求とともに表明されており、この要求は改革の必要性によって堅固になっているのです。

この著作がとりわけ重要なのは、物質文化と、その政治闘争への移し替えの問題を指定している点です。農民は、パンや塩、肉、ワインのような基本的な財に強く執着していますが、これらの「物質」を「上層部のフランス」の諸要求と繊細で強固なやり方で結びつけることにより、議論の核心に据えているのです。

c ティモシー・タケットの『人民の意志によって』、大きな転換点

ここで一息入れて、ティモシー・タケットの『人民の意志によって』に敬意を払うことにしましょう。「1789年の議員たちは、いかにして革命家になったのか」という、一見するとナイーヴな問題を指定することで、このアメリカの歴史家は革命の最初の年に対する見方を根本的に革新し、議会の論理を理解する道を開き、諸事件の生成に関してまったく新しい解釈を提案しました。議員たちの社会的な起源を研究することで、著者は「あらかじめ計画された不可避の革命」という神話を破壊し、議員の仕事や発言、投票所での位置など物質的な諸条件が、まず態度に、ついで意識の持ち方に帰結し、ついには予見できなかった政治参加に至ったかを示しました。議会での毎日の過ごし方、緊急な決定、長く続く動揺が結局は歴史に「中断」をもたらし、政治を創造したのです。そのかわり、代表者たちはまだプロの立法家ではなく、次第に予想のつかないものになる状況の進展に、時として追い越されてしまいます。「大多数の議員にとっては、フランス革命の

思想的正当化は、啓蒙思想のさまざまな傾向の中から自分たちの目標にもっともよく適合するものを選ぶことで、事後的に『発見』されたのである。¹⁴⁾」著者は的確なやり方で1200名の代表者を研究することから始めます。貴族は啓蒙思想的ではなく、その多数は田舎の軍事貴族、もしくは威厳と財産のある古くからの貴族です。聖職者は深く分裂しています。多くの司祭の分離は6月に、議会のあらゆるメンバーの統合をもたらします。第三身分は雑多ですが、「革命家」から構成されていたわけではありません。もっとも急進的なのはパリの議員ですが、討論が始まってずっと経ってからでなければ到着しませんでした。彼らはむしろ「不確定な社会的突然変異者¹⁵⁾」でした。そのかわりに彼らの多くは直近の数年に、市町村の統治を経験することで、集団政治の分野での知識を獲得していました。それで彼らは公共の分野において新参者ではなくなっていたのです（全身分の議員のうち217名は地方議会に参加したことがあり、65名はかつて自治体長でした）。選挙戦を通じて、彼らはフランス全体で討論されていた4つの問題に慣れていました。すなわち君主制と主権の問題、民衆と彼らの政治的役割、貴族と封建制度、統治の様式を変える必要性です。これらはいずれも、国王の人格に対する絶対的な尊敬と結ばれていました。彼らの計画は、といっても多くの人が表明したわけではありませんが、個人と集団の諸権利を保障し得るような憲法を平和的にフランスにもたらし、徴税方法を最終的に規定するとともに課税を平等にすることでした。それに対して、5月5日の三部会開催以降、権力の側からはほとんど何もなく、いかなる政治的意思も表明されず、何事も未決定のまま議員たちを身分ごとに分けておいたのですが、この未決定があらゆる不満の高まりを引き起こすのです。

6週間たつと、議員たちは政府が提案した改革案の空虚さを見てとり、暗黙のうちに君主制の上に立つ主権を持った議会を構成します。彼らはすべての課税が非合法であること、彼らの同意がなければ新たな課税はなしえないことを宣言します。6月20日には、王国が憲法を持つまでは解散しないことを誓います。こうして政治革命に踏み込んだのです。

Ⅱ 共和国の本性 戦争の中での誕生と国家による暴力の肯定／1792年 戦争とその共和制の本質の問題

革命における暴力は、各世代の歴史家にとって、しばしば対立の「場」であり、常に討論されています。

フランス革命を弁護する人々は長い間、この暴力を歴史のプロセスに固有のもの、社会が再生し、旧世界が抵抗しながら滅びるプロセスに伴う、一種の不幸な必然性と理解することで、免罪しようとしてきました。革命を中傷する人たちは、民衆の厄介な暴力を、勤労者であるが故に危険な大衆による統御不可能で動物的ですらある暴力を問題にしたり、恐怖政治が象徴する、止めることのできない暴力のシステム、系統的で機械的な暴力を問題にしたりしてきました。ここにおいてもフランス革命に批判的な歴史学は、フランソワ・フュレを筆頭に、フランス革命と20世紀の共産主義革命を結び付けるのを忘れませんでした。後者の全体主義的な形態は、1793年9月から1794年7月まで何カ月かの革命政府の経験に母型があるというわけです¹⁶。暴力は相変わらず、もっとも取り上げられる分野ですが、200周年以降は問題設定が洗練され、大きく変わったことを指摘すべきでしょう。

今では、単一の表明様式のもとでの一かたまりの暴力として革命を思い描くことは困難になっています。ジャン＝クレマン・マルタンの『革命と暴力』という試論は、20年がかりの研究の総括ですが、暴力が多義的であって、反革命家によって煽られた面も多い暴力の責任を単に革命家のみに帰することはできないことを示しています¹⁷。この指摘により、著者の研究が示す仮説の一つが理解できます。長く主張されてきたこととは逆に、恐怖政治の暴力は国家の確立のプロセスに立脚しているわけではありません。この生まれつつある国家はウェーバー的な視点から、あらゆる抑圧装置を独占し、自己の新たな正当性を確立するためにその抑圧装置を誇示すると考えられてきたわけですが、実はそれとは反対に、共和暦2年における暴力の氾濫は、全般的に、国家の不在と個人的な不正行為に起因す

るのであり、公安委員会は、それらの不正行為を認知した時には叱責したのです。

この試論にはもう一つの重要な事実も確認されています。暴力と革命は突発的なものではなく、18世紀を通じて受け継がれた遺産の成果なのです。普通に考えられるよりもずっと長い間、一連の緊張が連続し、暴力が見世物になって、それに慣れていったのです。それで、民間の紛争の際に容易に暴力が振るわれるようになったのだと考えられます。ジャン・ニコラがフランス全体に関して8500件の反乱を研究した書物は、18世紀を通じた国家と住民の間の暴力についての歴史学の画期となるものですが、上の点を十分に描き出しています¹⁸⁾。

しかし最近の現実には革命の暴力の問題に別の面から光を当てています。戦争が現実の問題となったからです。2001年の事件は、攻撃されたと感じた国は、いかに自国民に対する強制のテクニックを展開し、悪魔として描かれた敵に対して広範に動員をかけるものか、文明の理念を守る義務を感じた国民全体に対して、報復能力はいかに努力を強いるものかを示しました。歴史は繰り返しはしませんが、私たちは戦争という要因をよりよく把握し、もう一度考察してみることができません。それは革命をかき乱した要因であり、革命の急進化と暴力の原因でした。急進化と暴力は革命の10年間、さらにはそれを超えてアミアンの一時的な講和が実現する1802年までの、より確実には1815年までの歴史に刻印を押したのであり、その最後の年にはヨーロッパの首脳たちは、革命戦争が変身した最後の戦争をワーテルローの最後の戦いで戦うのだと考えていたのでして、ナポレオンは自らの意思に反して、1792年に共和国の誕生とともに始まった戦争の熱心な後継者とされたのです。ここには多くの考察の余地があります。

戦争問題が位置している共和国の苦痛に満ちた生成には、他のいくつかの段階があります。1791年夏の諸事件から数カ月たって、1792年初めになると、好戦的なブリソと不戦に賛成のロベスピエールというよく知られた対立が生じますが、それは共和国の生成に関して別のやり方での問いかけをもたらしものです。否応なく困惑させられる考察を要する問いかけなのですが、「この体制は戦争なしで

可能だったのだろうか」, 言い換えれば「16世紀以降のオランダがかろうじて一つの成功例ではあるけれども, 共和制は, 君主制に取り囲まれた中でその存在が考えられるような, 地理的な共存が可能な, 自立した政治原則なのだろうか」という問いかけです。共存可能であるにしても, 諸王国の中での共和政府の存続の可能性はどの程度のものでしょうか。というのも, 共和政府の外交の原則は主権の新たな分配様式, および実定法の中に自然法概念を取り入れた国際法に基づかざるを得ないからでして, いかなる場合にも支配的王朝どうしの, しばしば秘密外交に依拠した, 家族間の私的な同盟には基づかないからです¹⁹⁾。

近代の共和国は, 議会や新聞, 活動家などの様々な機能を持った討論を認めることによって, 世論を第4の権力として自らの構造のうちに取り込みますが, それは領地の分割や国境の定義を国王の力のみの表現とみなす古い論理を破壊します。共和国は愛国的になるか, さもなければ存続しないものなのです。その意味において国民共同体は, 古い体制において行なわれたような, 外交的取り決めの名による国土のいかなる部分の割譲をも, 断固として拒否することによって成り立つのです。

さらに新しい国際法は, 既定の国境の裂け目を乗り越える原則に基づいており, 正義と透明性の概念を新しい政治の中心に据え, 諸国民が社会契約の基盤として自分たちの体制を選択する自由な決定権を設立します。これらの理念は, 1790年5月22日の平和宣言で明確にされ, クローツ男爵の主導により外国人の代表団が国民議会に迎えられ, 1790年7月14日の連盟祭の演出に引き継がれました²⁰⁾。この権利は各王国の歴史的個別主義を超えるもので, 生まれとは独立にすべての人に適用されるものでした。アヴィニョンとそのフランスへの併合という象徴的なケースは一種の威嚇射撃となって, ヨーロッパの宮廷を深刻に不安がらせたのでした²¹⁾。

政府の政治形態に対する国民の自由な同意というこの政治哲学は, 逆説的ながら, プリソ派陣営が, 自分たちの主張した共和制のアイデンティティを損なうことなく, 戦闘的紛争の概念をいかにして引き受けることができたのかを明らかに

してくれます。戦争は事故でもなければ、単なる状況の産物でも、革命が横滑りしたことの途轍もない印でもありません。戦争の存在理由を、亡命貴族の紛れもない挑発に求める必要はないのでしょうか。それは、そこにこそ当惑させられる問題があるのですが、共和制の本質でありうるのです²²⁾。こうした展望においては、君主体制との対決は、抑圧された諸国民を解放する義務の確認から生じる断固たる対立なのでして、ブリソ派の精神においては共和主義の証となるもののなのです。文字通りに情熱的な戦闘員は、近代共和国の堅い台座を鑄造すべき戦火の試練をこうむるのです。革命の運命はこれ以降、軍の帰趨に結び付けられます。ジャコバン派の革命を弁護する人は、紛争をジロンド派の無責任さによるものとし、モンタニャール派は関わりのない紛争を引き継いで、恐怖政治に基づく革命政府を樹立することを余儀なくされたというわけです。戦争期に批判的な歴史家は、暴力の渦に巻き込まれたフランスのみが有罪であるとみなしました²³⁾。この見方は調整が必要です。つい直前に一触即発の状況があったことは、歴史の教科書ではあまり触れられていませんが、当時の当事者たちは皆よく知っていました。彼らは、革命の理念が広がるのを心配するよりも先に、君主国家の干渉癖の方をまず認識していたのです。フランスにおいてもヨーロッパ全体においても、1775年のポーランドにおけるプロシアとロシアの役割、1782年のジュネーヴにおけるフランスの役割、1787年のオランダにおけるプロシアの役割、1790年の再びオランダにおけるプロシアの役割を誰も忘れてはいませんでした。いずれの場合にも、君主制的な外交秩序が脅かされているという名目で、国内紛争を抱えた国に部隊が侵入し、破滅に瀕した古い体制の勢力を再建しようとしたのです。1792年のフランスは別であると、なぜ言えるのでしょうか。権力についた共和派は、確かに陰謀説を取り上げました。危機は明らかに現実のものだったのです。ですから1792年の雰囲気での戦争突入は、フランス政治の「アメリカ的」次元で捉える必要があるでしょう。今のところ、この点はあまり検討されていませんが、ブリソ周辺の人々はアメリカ革命の出現の条件と、大西洋のかなたの共和国の誕生の要件としての戦争の暴力から強い印象を受けており、自分たちの政治の分析に「アメリ

カ的」次元を組み入れたのです²⁴⁾。若いフランス国家の建国の父たちがオーストリアの皇帝権力、およびその直後には世界一裕福な海洋王国であるイギリスにあえて挑戦し、極端に手厳しい戦いを引き起こしたのは、彼らが身に着けていた救世主的な性格によることは確かです。この性格が、絶えず強迫的に陰謀を告発し、戦争を引き起こすのが不可避な必然であるようにさせたのです。フランスの革命戦争のアメリカ的起源と、立法議会でのフランス人の討論に適用された共和主義の宣伝熱の無視しえない広がりとは、これから展開すべき研究分野です²⁵⁾。

1792年4月20日に宣戦布告され、「祖国は危機にあり」宣言の最悪期を過ぎ、1793年3月18日のネールウィンデンでの敗北とデムーリエの離脱によってこの年の戦いに敗れ、5月31日と6月2日の危機でジロンド派が抹殺されると、戦争と政治を結び付けるものとしての紛争が新たな解釈の形態をとるようになります。ハイム・ビュルスティンはフォブール・サン＝マルセルについての研究において、都市民衆の政治化の動きが同時に「軍隊化」と一つになること、および共和国が血と紛争から生まれるのが余儀なくされることによって、政治的には災厄たりうる勢力が現れることを示しました。

「社会の広い意味での民主化が進行している最中において、戦争が引き起こしうる起爆の効果、および急進化のきっかけおよび動因としての特別な役割については、十分な考察がなされていない。実際、戦争はそれ自体では、深刻な政治的・制度的急変を必然的にするものでもないし、民衆への個別の譲歩を導くものでもない。そのことはフランス史が示している。同様に、政治的民主主義化の過程は制御され、漸進的で調和のとれたやり方で進展し得る。これら二つの要因が重なり合い、特別に厳しい政治闘争がそこに加わった時、まるで経験したことがなく、結果を測定することが困難なような爆発性の混交が生まれるのである。(中略) 社会のこの軍事化が愛国的な結びつきを創出するが、同時に、公共のことがらの管理に自らが加わろうという新しい意志が、主権の問題を惹起するような政治的メカニズムをも生み出すのである²⁶⁾。」

従って、イギリスのくびきを振り払おうとするアメリカと、ヨーロッパ外交の

もとにあるフランスの間には、つながりがあるのでしょうか。逆に、ロベスピエールとブリソが相対した討論において考えられていなかったことですが、より「現代的」なのは恐らく、皆が考えているように、アメリカ的な共和主義者であり、アメリカ風の自由主義的な共和制モデルを擁護するブリソではありません。実際、戦争を避けることが不可能なのは、純粹にブリソがもたらしたものであって、ロベスピエールの見方はそれに反対しているのです。こちらははっきりと現代的であって、すでに古典的となったオランダ型・アメリカ型の道、マキャベリ的な意味での対決を拒絶し、あらゆる現代戦争が示すことになる群衆心理を見越しているのです。それで、時や場所を問わず、軍事使節団や、容易に占領軍となる解放軍の「有徳な」諸原則を拒否するのは、この1792年4月のロベスピエールは戦争への反対者であって、前年の1791年5月に死刑を拒否したロベスピエールに通じるものがあります。その時に彼は、市民社会はその力のすべてと権利への確信をもってしても、孤独で投獄されており、基本的にみじめな被告に究極刑を科すことはできないと説明したのです。この説明においては、武装解除され閉じ込められた人に対して、社会は不当な戦争を宣言する権利はないのです。この時に、このアラスの弁護士は近代的共和主義者を先取りしており、共和制という名の体制の政府にとってもっとも狭い道を指し示したのです。内戦という病的な骨肉の争いが、この人物の別の面を露わにするのは、まだ先のことです。それは共和暦2年も末の1794年のことで、恐怖政治のいさかきが政府のシステムとなってからのことでした。これが革命というものでしょうか。

二つの道が可能でした。戦争か平和です²⁷⁾。ローマ・イタリア・アメリカのモデルが勝利しました。すなわち戦争ですが、その戦争は数百万の市民の政治化に彩られる新しい民主化という条件のもとで、また別のかたちでの内戦を生み出すほど激しく、それが前線にも反響するような、厳しい社会的緊張を背景に持って、戦われたのです。共和主義の戦争は、20年前にはアメリカ植民地の中に留まりましたが、今度は世界的な市民戦争になりました²⁸⁾。生まれつつある国家の頂点で、戦争指導をめぐる選択と政府を公安委員会にすることをめぐってであれ、パリの

フォブールの社会においてであれ、共和国を緊張と一連の紛争をもたらし、それを回避しえなくしました。紛争とその結果は、政治や国民、戦争のやり方そのものまでもの変化を促進し、新しい体制に対して、国の再生と変容の力を付与しましたが、その力はそれまで知られていなかったものでした²⁹⁾。新しい公共秩序を強制し、戦争努力にむけて社会全体を組織することは、政治文化を共有し、最低でも形式的に、よりよくば心から、共和制のイデオロギーに同意してもらわなければ、成し遂げ得ないものだったのです³⁰⁾。

Ⅲ いかに革命を終わらせるか：テルミドールの「巻き返し」

テルミドールもしくは政治への幻滅、ということでしょうか。確かにそうです。しかし、いずれにせよ、英雄的な革命と凡庸な共和国の間に新たな境を設けてはなりませんし、死せる英雄の伝説を書くにはエブリマン氏的な生存者が必要なことを理解せねばなりません。純粹で誠実で清廉な人々が、立場は様々ながらも、一つの党派をなして、それが同じ政治的家族の中の腐敗した者たちすべてと対立しているではありません。困難でもあり興味深くもあることですが、彼らは、実物と鏡像の関係で一体だったと見なければならず、互いに断固として排除しあう別々のグループだったと想像するのを拒否せねばならないのであって、彼らはむしろ実践や言説において相互に助け合っていたのです。

テルミドール派にとって、1794年夏のもっとも抑圧的な事件によって始まった悲劇的なこの時期に、政治的に重要だったのは、「祖国のために生きる」という文に再び意味を付与することでした。そのためには、周囲を適応させるとともに自分自身も適応し、過去と和解し未来を準備する体勢を作りださねばなりませんでした³¹⁾。政治的変異論に向けられた攻撃を鎮めるために、また私的分野に価値を与えるとともに公的空間を平和にすることで政治について新たな空間を思い浮かべさせるために、レトリックという武器庫から手段を手に入れなければならませんでした。さらには、政治的対決の外に、たとえば公共の建設の要因となった

行政を押し出すことで、国を建設する新しい方式を思い描かねばなりませんし、1814年まで生き延びる世代が1794年の試練をいかに乗り切ったか、またその世代は共和暦2年テルミドールの転換という初めての恐るべき良心の試練を氣にかけたかを理解しようとしなければならないのです。

この試練の時期から、テルミドール派は新たな共和国の基礎となるべき成果を引き出しました。恐怖政治から抜け出すだけが全てではなく、平和で理に適った政治、死刑による排除の源にしかならなかった情念からはできる限り離れた政治に入らなければならなかったのです。この目的を達成するには、政治的節度の道を見つけねばなりません。1815年と同様、一つの深いつながりが政治的節度の変わりやすく、それなりの思慮に基づいた態度を結び付けていたのです。しかし1795年-1799年の総裁政府期は2度目の復古王政の時とは状況がかなり異なっていました。

a B. バチコとリュザト。テルミドール、または政治への幻滅

共和暦3年の政治生活の基本的な特質である豹変について考察した、プロニスラフ・バチコの分析は、これまでとは全く異なったものですが、大変魅力的です。テルミドールの反動を、社会的民主主義によって革命から追い落とされるという考えから不安になったブルジョワ階級が権力を取り戻したものとするような解釈は、ここでは消滅しています。

フランス革命は、古い権力を破壊し、新たな諸制度を作り出して、それを2度と手放さないようにするための、固有の力学という面から考察されています。政治とは、それぞれの時期において、その時の支配層が定める目的に応じて、共同体のメンバーの間の位階制的な関係形態を強制することを目的とするシステムです。この意味において、真の問題は、バチコによれば、国民公会の指導者たちの社会・政治的な矛盾の歴史ではありませんし、彼らの不道徳性でもありません。問題とされるのはむしろ、独裁と恐怖政治を担った人々が、自分たちの権力維持を可能にするような政治条件を発明したやり方であり、また同様に、彼らがロベ

スピエールを支持し、自由を抹殺する法律を採択した後で、予想もしないようなやり方で同じロベスピエールを中傷したこと、そしてそれと同時に自由主義的な共和国を建設しようとしたことなのです。パチコは、そこに真の矛盾を見出すのです。この歴史家は、テルミドール9日の転覆の後での演説を研究して、公会議員が4つの説明軸で恐怖政治のエピソードを示そうとする意志を読み取ります。彼らはそうすることで世論に対し、自分たちには責任がないこと、もしくは自分たちは無罪なこと、さらには自分たちは犠牲者なのであるから自分たちの豹変は正当であり、論理的でもあり得ることを示そうと期待しているのです。

第一の説明軸は、恐怖政治はひとえにたった一人の人物、すなわちロベスピエールの仕業であることです。この暴君が殺されたのですから、危険は去ったのです。第二は、恐怖政治は行きがかり上の事故に過ぎず、国民公会が担って進行中の歴史の周辺でのできものに過ぎないのだから、すぐに消滅させられるだろうというものです。第三に、恐怖政治は権力のシステムであって、このシステムが分解されれば無害になるということです。最後に、とりわけ第四の説明軸は、恐怖政治は恐るべき状況の産物に過ぎなかったのだから、よく注意すれば再生することはないだろうというものです³²⁾。この議論はフリュクチドール11日にひとりの議員によって、反ジャコパンの反動と恐怖政治の役者自身による恐怖政治の告発との歴史の転換点をなす演説の中で語られました。タリアンがその国民公会議員であって、彼は同僚に向かって「恐怖政治のシステム」を定義して見せたのです。ほめかしや、かなり露骨な密告といった恐怖政治家の技術、善良な革命家や正直な人物の中に絶えず仮面の陰謀家が入り込んでいるという強迫症的な固定観念をふりかざして、タリアンは的を突き、皆の眼に自分の唐突な寝返りを明らかにしたのです。彼は、ボルドーに派遣されていた時に職権を乱用して死刑を乱発し、そのためにバリーに召還され、ロベスピエールに軽蔑されたのですが、その彼が国民公会議員たちに対して、皆がともに、いつの日か過去を批判される危険を冒してでも、権力を集団で保持すべきことを具体的に説明したのでした。それまでの厳格さを否応なく保ちながらも、つい前年には熱望はしないまでも支持はしてい

たものと対極に位置する社会を建設するために、政治的言説を根本的に変換せねばならなかったのです。公会議員たちは、それほど騙されやすくなかったのですから、同僚の演説を聞き、その恐怖政治家としての過去を思い出して、このタリアンの突然の政治的告知に笑ったことでしょう。しかし、タリアンが政治的変節漢、風見鶏、すなわちバチコによる恐怖政治からの出口となる政治路線の定義によれば「テルミドールの政治風景での典型的な人物像」になったことを意識した時、彼らの笑いは苦いものとなったでしょう。

フリュクテドル半ばに、ロベスピエールおよびその共犯者でまだ生存し、隠れている者たちに対する異様に激しい一連のパンフレットが発行されることにより、この政治的駆け引きは成功を収めました。隠れている共犯者たちは「ロベスピエールの尻尾」とされ、フランス革命初期の貴族というヒドラの頭のイメージに絶えず重ねられたのでした。これら二つの危険を並べて示すことにより、共和国は人々が連帯すべき唯一の「政治的中心」として位置づけられることになるのです³³⁾。

共和暦3年の政治階級における基本的な日和見主義は、従って、ルフェーヴルが唱えたように、社会的な要請が政治的要求と齟齬をきたしたことによるのではなく、逆に、自由主義の誘惑と恐怖政治から受け継がれた排他主義の文化の間で絶えず揺れ動いている点によるのです。テルミドール派という中心は、ようやく平和になった共和国への連帯という幻想を維持しているのです。実際にはそれは、共和暦3年を通して、自分たちを作り直すことになりかねない反対運動すべてへの抑圧政策を続けます。それによって、昨日の恐怖政治家にして今日の「リベラル」である構成員が、近代政治の本質を把握し、「社会の紛争的性格は、政治が機能する源泉であって、根こそぎにすべき悪ではないことを認識する³⁴⁾」点において無能であり無力であることを証しているのです。

変節したモンタニャール派が平原派と合体した議員グループは、穏和なレトリックに頼ろうとはするものの、国民議会の討論をコントロールしようとする意志と、自分たちが熟知している執行権力の機構を使いこなす能力において傑出して

いました。このことを認めるという意味においては、ルフェーヴルとバチコは、外観とは裏腹に、歩を並べているのです。共和暦3年には、執行権と立法権の中心は、委員会の独裁が残した材料を使いながら、形成される途上にありました。これによって、執行権と立法権が混同されたまま、恐怖政治から反恐怖政治の政策までが混じる異常さが続く中で、中道の共和国の新たな基盤が確立されることになるのです。

より最近ではセルジオ・リュザトがテルミドールの契機について輝かしい考察を提示しました³⁵⁾。テルミドール派についての研究史における先行研究を踏まえ、それらが提示した仮説には異議を唱えないものの、彼は現在の研究状況が示す疑問の核心について別の問題を提示したのです。彼は、処刑の波を生き延びた役者一人ひとりに対してテルミドールが個人的に投げかける、うずくような良心の問題を問いかけたのです。彼の研究は個々の「墮落者」や個々の胡散臭いグループにこだわったりせず、政治社会全体を取り上げるのです。事柄の成り行き上、出来事の論理的な展開の結果として当然ながら、全体も個々の人間も変化しました。すべての人が、多くは重苦しい良心の呵責とともに、その点を自覚していました。この現象は、節を貫いた者についても同様でした。なぜならば、行動の正しさを告知する条件は、新しい政治の形状の中では、新たな議論と新たな推論を用いざるを得なかったからです。セルジオ・リュザトの試論の結論を再録しましょう。

「テルミドールの悪夢とは、敵は他者だという認識が自己のアイデンティティの問題に変わったことを発見する点にある。『反動家』とは公会議員なのだ。一人の敵はもう一人別の敵、すなわち革命家自身を隠しているかも知れないのである。

ビヨール・ヴァレンヌによる、再生のための諸原則についてのヴォルテール風の銘句を読んでみよう。

『自分を裏切るな』。テルミドール以降、フランスにおける革命の伝統の歴史はすべて、その生存者が同僚に宛てて自らに忠実であるように求めたこの呼びかけの中にある。革命の秋以降、革命家たちは単に裏切られることへの恐れのみなら

ず、自分が自分を裏切ることへの恐れにも取り付かれたのである。³⁶⁾」

テルミドールの最初の余波と、それに続く新聞でのキャンペーンの後、1794年11月23日から12月16日まで、カリエの裁判が行われました。この裁判で、かつてのナントへの派遣議員であるカリエは、彼が命じたり放置したりした溺死刑について答えなければならなかったのですが、それは公会議員の間に深刻な内省を引き起こさずにはおきませんでした。彼らは、一時的には理想的なスケープゴートが見つかったことでほっとしたのですが、すぐに、かなり荒々しいやり方で、自分たちの連帯責任の問題に直面したのです。もっとも明敏な人たち、もしくはもっとも正直な人たちは、自分たちがカンタル県の議員（カリエ）の共犯者であり、彼と同じように恐怖政治の法律に投票していた頃の自分自身の自我から距離を置くという作業に、より長くかかりました。議員のカンボンはフリメール3日の議会で「人間性に対する残虐行為」の問題を取り上げ、それによって同僚を告発したのですが、カリエを攻撃するとともに、「我々はいかにして、かつての我々のようなものになり得たのだろうか」という本質的な疑問に要約できる問いかけの深淵に、国民公会を直面させたのでした。本人にとってさえ謎となってしまったようなこの問いに答えるためには、自分がやったことに耐え、自分になったものを引き受けることを可能にするような擁護システムを見つけなければなりません。カルノやランゲのように侵しがたく勇敢な人たちから、フレロン、バラス、タリアン、フーシェのようにシニカルで無慈悲で、派遣議員だった時の野蛮な行動はカリエによく似ている人たちまで、あらゆる態度のリストはおよその見当がつきます。この1794年秋に、これらの哀しく怪しげな過去を持つ人たちは、告発された同僚を誹謗し続けました。それによって、自分たち自身の職権乱用を忘れさせるとともに、恐怖政治がひとつの「システム」であって、彼ら自身が単なる実行係の位置に貶められており、逆らい得ない権力によって動かされていただけの犠牲者なのだと示そうとしたのです。

いずれにせよ清算の時がやってきて、人々は自分にできるやり方で、大急ぎで正当化を試みました。例えば、恐怖政治の演出家であるダヴィッドは、自分とロ

ベスピエールの関係を問われると、自分の誤りは「世論の誤りだったのだから、許されるべきだ」と主張しました。革命裁判所のある判事は、ダントン派とエペール派の恣意的な排除に参加した廉で被告席に着かされると、ただの斧を裁判することができるだろうかという問題を投げかけました。というのも裁判機構における彼のつましい役割は、彼を考察力のない当事者の地位に貶めていたからであり、従っていかなる責任もなく、その結果、良心の問題もないからです。さらには、自己の地位を根本的に変えることは不可能だったのだから、状況に応じて正反対に異なる役割を負わされたことを恥じ入る必要もないというわけです。そんなものでしょう。恐怖政治から抜け出す時に、フランス革命は動揺し、断罪すべき無道徳と赦しがたい不道徳の間で、終わりのないめまいに囚われていたのです。

セルジオ・リュザトが明らかにした議論は、そのことを忌憚なく示しています。共和暦3年には政治言語において、2種類の人間を対立させ、各革命家の人格を分裂させる、2項式への頻繁な回帰が見られるのです。公吏の立場と私人の立場は、これ以降、相反する位置を占め、あたかも敵対するのです。1789年8月26日の人権宣言は公人と私人、自然法に基づく人間と実定法から生まれる個人、人と市民を正しく和解させたのですが、恐怖政治はこの繋がりを恒久的に破壊し、各人の内奥にひび割れの線を入れました。そのために全ての人が自我の中で、人か市民のどちらかを犠牲にせざるを得ない際に、自分を偏狭なやり方で裏切ることになったのです。パ＝ド＝カレー県の議員であるルボンは、フランス北部に派遣された1年後に、弁明の手紙の中に以下のように書きました。

「私はと言えば、以下のことを宣言する。私は決定的に何者かでありたく、市民の状態と私人の状態の間でしか選択をなし得ないのであるから、私は語の十全の意味において市民であろうと決心した³⁷⁾。」

いうなれば、反革命と考えられた人物の命を左右する権利を自分たちに与えた法が要請するものを想像してみない者すべてに対する彼の軽蔑の表明です。彼は、その上、革命の暴力行為について法文尊重主義を分かち合っていないながら、テルミ

ドール10日以降には、真剣にであるかどうかは別にして、心の中で私的に、死刑の法への絶対的服従の義務とは正反対の関係にあるヒューマニズムの価値を認める人たちに対しては、嫌悪感しか抱かないのです。ギリシア悲劇は、古代文化に夢中になっていた人たちの精神に焼きついており、彼らはペロポネソス戦争の終わりは（ジュール・イザーク³⁸⁾が自分の共和国が廃墟になったのを見るように）自分たちの経験と関係があると意識していたわけですが、テルミドール派たちも、選択の時が来れば、否応なく自分たち自身の一部、すなわち私人か市民かのどちらかで、多くは後者を裏切るだろうと知っていたのです³⁹⁾。このようなわけですので、共和暦3年には人々は自己否定するか、自分の恐怖政治家としての過去とテルミドール派としての現在の折り合いを、自分なりにつけるかするしかなかったのです。

こうした要素を顧みれば、自分たちにとって過去のものとなり、そこに立ち返ってはならないものについて、何人かの人が忘却もしくは特赦を要求することにこだわったことも、よりよく理解できるでしょう⁴⁰⁾。こうした条件のもとでなら、公会議員たちの最後の立法措置の一つが彼らの政治活動全体に対する特赦を採択するものであったことにも驚かないでしょう⁴¹⁾。あらゆるお手盛りの特赦法がそうであるように、この法律の結果も忌まわしいものであり、公会議員の信用を一層傷つけることになります。多かれ少なかれ恐怖政治に浸った議員に対する腐敗の疑惑は、開明的な世論の一部に共有されていたのですが、それが増幅されずにはおらず、統領政府が生まれる以前から、この政府の「道徳性」を疑わしいものにしてしまったのです。

しかしながら、テルミドール派のドラマは、必ずしもこれらの人々が変化したことではありません。それはむしろ、彼らは自分を見失うか、消し去り得ない過去に背を向けるか、さもなければ多少とも長い間、自分の政治的人格が二重人格とされ、偽善者、風見鶏とされること、それも他人や一つの思想、プログラム、党派を裏切ったのではなく、それよりも悪いことに自分自身を裏切ったのだとされることを耐えねばならなかったことにあります。そうしなければ彼らは、罰せ

られずに変化したり、自発的に忘却したり、自分たちの指導者を許したりできなかったのです。

IV 共和主義者にとどまるための一層の努力：統領政府期についての研究分野

a 矛盾したフランス政治モデルの誕生

大統領職の「君主化」は第五共和制の冒険の始まりから、モワザン⁴²⁾による例の滑稽なヴェルサイユ宮廷の年代記⁴³⁾に関連して指摘されましたし、また1958年の本物の「強権発動もどき」から、パトリック・ランボーによるニコラ1世とその取り巻きたちの統治の年代記⁴⁴⁾に至るまで、国家元首のボナパルト化が指摘されています。こうした指摘によって、観察者は、国家の頂点において共和国の意味・方向が空洞化される危機が恒久的であることを見て取っているのです。君主制や帝政は、そのあらゆる特性を持って誕生し、そうした起源の輝きを保持しようとするものですが、共和制はそれとは反対に、永遠の生成、恒常的な教育、変化する自由や進歩する市民の共同体への絶え間ない適応なのです。人は共和主義者として生まれるのではなく、それになるのだとカルノは言っていましたが、共和国とは、歴史の進歩によって確たるものとされた不可侵で冷厳な与件を成しているわけではありません。むしろ、その逆です。それに、フランス人であるという事実はヨーロッパの政治地図の現実に関心を開くことを妨げるものではありません。共和国とは、革命と戦争のカオスの中から生まれてきた危険なものであると長い間みなされてきた、異常なものなのです。

こうした条件において、いかにしたら共和主義の契約を常に再生させ、絶えず説明し、理解し、生き生きとしたものにする必要がある共和主義の起源を見つけられるでしょうか。見つけなければ、市民が無関心に陥り、投票率が低下し、共和国の創出について無知になる危険に、そして共和主義者としてともに生きようという意欲を沸き立たせることで市民の共同体を基礎づける価値の忘却に陥るの

です。この生きる意欲の政治的本質とはいかなるものでしょうか。革命期はそれにどのような光を当ててのでしょうか。

明らかなのは、共和国の根はフランス革命にあるとしても、革命のどの時期であるか、1789年か1792年か、1793-1794年か、またどの共和主義者かが問題になることです。1789年-1799年の10年間の基本的な表象は、短絡的な単純化を伴うメディア化によって、しばしばフランス革命は恐怖政治に、恐怖政治はギロチンに、そしてギロチンはロベスピエールにと還元されます。こうして、生存する最後のフランス人である処刑人をロベスピエールがギロチンにかけているという、テルミドールの直後に出されたカリカチュアと同じ点が強調されるのです。しかし共和国はそれとは別物で、ヴァルミでだけ生まれたでもなければ、共和暦2年の激動の時にのみ生まれたわけでもなく、もう少し後において生まれたのだとしたら、どうでしょう。すなわち、長い間嫌われ、バラスのようなずる賢い党派がいたためにあざけられ、ゴンクール兄弟によって描かれ、金利生活のブルジョワジーの勝利と見るマルクス主義的歴史学からは排除され、保守的な傾向の歴史学ではこけにされて、1799年秋のある日に粗野なやり方で手に入れにきた將軍に身を任せた「ろくでなし」とされている、あの共和国においてです。

今は、フランス革命をひとつの塊とする起源の神話や英雄伝説を克服すべき時なので、フランスに指導者の地位と男性的なオーラを求めようとする消し難い欲求なしで済ませようとする態度を忘れてはならないでしょう。共和主義者になるためにサド侯爵が1795年に求めた努力⁴⁵⁾は、革命の魅了から覚めて大人となり、真正の共和国を建設するために、今でも実行すべき課題です。この共和国は多元的で非宗教的であり、世界に開かれ、民主主義的、功績主義的、能力主義的で、国民主権は単なる字句に留まらずに、執行権の真の責任制・独立した立法権の活動・およびそれらの権力から分離した司法権によって具体化されているものです。

別に、ここでは総裁政府という一時期のモデルを復権させ、前後の時代と切り離して、他のモデルと対比するのが問題なのではありません。単にこの4年間

(1795年末-1799年末)がどのようなタイプの政治的実験室だったのかを簡潔に示すだけです。これは大きな知的自由と大きな理論的発明の時期、共和主義という語のあらゆる意味において、その語が持ち得る意味の可能性が開かれ、色々に想像された季節、生まれつつある体制の安定化を試みる時でした。実際、統領政府が示すように、共和国は単一ではなくてかなり多様であって、この、社会の混乱と政治の怠慢という現実を生き延びた、傷を負った時期のもっとも複雑な遺産のひとつは、共和国を一枚岩で不可分な現実と考えるのではなく、複雑で多様な解釈を許し、断片化していて、毎年の選挙によって絶えず再構成されるものなのであって、表現の自由や緩やかな緊張の共同体にもそうした要素が現れているのを認めるといことです。共和国とは、公共空間を秩序付ける最良のやり方に関しては、決して完成することなく、永続的に造り続けることで出てくるのであり、共和的な公共秩序が受け入れられて基礎づけられるという面と、民主主義化が進む過程で制度が拒否され、公共の異議申し立てが絶えず行なわれる可能性があるという面が共存しているのです。

共和国は革命から引き継いだ性質を持つものであり、革命は革命で啓蒙思想の唯一適法的な娘であると考ええるほどナイーヴなことはいけません。君主制は伝統にのっとっていけばそれで十分なのですが、共和制は絶えず呼び起さなければいけない意志から生まれるのであり、古代派と近代派、革命派と保守派、急進派と穏和派、自由主義者と国家主義者、秩序維持的な市民とあらゆる自由の擁護者の間で定義をやり直し続けるという恒久的な危機のなかで構築されるのです。失敗は予想されていたなどという紋切り型とは裏腹に、総裁政府は恐怖政治から生まれた体制の対照的な面を見せています。ヨーロッパの一部に対する戦争を続けながら、もっとも深刻な経済危機の一つに直面し、君主制復古の味方と共和暦2年の一義的な共和国へのノスタルジーの間で引き裂かれる中で、こうした対立にもかかわらず、もしくはこうした対立の中で、民主主義の発展と安全へ傾く傾向との間で揺れながら、現代共和国の主要な相貌を示しているのです。総裁政府という共和国は、対立し、絶えず考え直さなければならない共和制の二つの母型を、

ずっと調整しながら、遺産として残しました。秩序ある共和国という母型と民主主義的な共和国という母型です⁴⁶⁾。

公会議員たちはまず、最高存在への一時的ながら致命的な礼拝のような宗教的次元から、出来るだけ早く共和国を引き出さなければなりませんでした。共和国は共和暦3年になってやっと、非宗教性の計画を確保し、総裁政府のもとでそれを制度化しました。1794年9月18日にカンボンによって宣言された原則は、彼の提案の第1条を占めています。「共和国はもはや、いかなる礼拝の費用も給与も支払わない」というものです。このデクレはフランスに、市民的・政治的次元の自律化と解放を打ち立てました。こうして非宗教的であらゆる宗教的影響から解放された近代国家が発明されたのですが、それは各人の自由、あらゆる人の私的信念の尊重、あらゆる礼拝の寛容、とりわけ無神論者の保護、そして共和国の内在的原則の確立に必要な不可欠な条件でした。共和暦3年フリュクチドールに採択された憲法の第354条はフランスの非宗教性を制度化しています。「何人も、自分が選んだ礼拝を法に則して行なうことを妨げられ得ない。何人も礼拝の費用の負担を強制されない。共和国はいかなる礼拝にも給与を支払わない。」並行して総裁政府は、あの世への恐れから完全に解放された知識、理性、教育を形成するための市民的な教化を考える意志をはっきりさせました。学士院の設立、旬日の維持、いかなる宗教的キャッチフレーズも持たず、この世紀の末のもっとも知識ある文筆家が集う新聞、リセの前身であるエコール・サントラルの設立は、社会を根底から非宗教化する政策の知的機構を提供するべきものでした。真に国民的で非宗教的な教育を公布しようとする、フランソワ・ヌフシャトーの疲れを知らない活動は、総裁政府の共和制建設の基本的次元を担うものだったのです。その後には政教協約が、ボナパルトのご都合主義による後退を露わに示し、教会が社会統制の役割をよりよく果たせるように大権を回復させることになるのですが⁴⁷⁾。

ですから、共和暦3年の憲法の第2編には、市民の政治状態に関するその最後の条項において、公民権の行使に関して最低限の知識を要求することが規定されていますが、これを共和暦2年の体験に対して恨みがましいブルジョワジーの表現

と読むよりも、むしろ能力の次元で捉えて、功績主義的な共和国を練り上げる試みと考えられるでしょう。民衆が公共の事柄への参加を目指す点に関しては、確かにより小心になっていますが、教育によって公民権を獲得でき、市民倫理を勝ち取ることができる点が意識されているのです。「若者は、読み書きと手仕事ができることを証明しなければ、市民台帳に登録され得ない」と規定されてはいないでしょうか⁴⁸⁾。市民の完成可能性は、共和国の本質そのものであって、憲法の条文に規定されたのです。その点に、しばしば非難されている共和暦3年の条文の強さがありますが、同時にそこに、共和暦3年の条文の弱さもあります。といいますのは、1789年・1794年の経験が生まれさせた民主主義的な政治化を排除し、条文と公共秩序のコントロールによって民衆から政治を、そして政治から民衆を、排除できているからです⁴⁹⁾。

そのかわりに、1795年からの時期には社会組織の新たな基礎づけを、美德を強制することによってではなく、個人的な自由とその威光の上に構築しようとした。1796年、1797年にバンジャマン・コンスタンが書いたものは、古代と近代の共和国に関する彼の後の考察を予見させるものですが、共和国が政府のうちに、また政府によって確固たるものになるとともに、市民に日常生活におけるあらゆる自由を与えるという新たな展望と必要を描いています⁵⁰⁾。革命から出て共和制憲法の秩序に入るには、新たな概念を取り入れるとともに、政治の新たな再配置において個人と国家はどのような関係にあるべきかという点に関する考察が要求されるのです。1795年から1799年にかけてのフランスにおける討論は、1787年・1789年にアメリカ合衆国で近代人の共和国を創出するために行われた討論とそれほど隔たっていなかったことが見て取れます。しかし合衆国がそのモデルを維持することになったのに対して、フランスでは（政府の不可視性という古くからの原則が強く刻印されていますが）1799年以降にそれを失い、もう一つ別の新しさを創出します。すなわち国民投票による共和^{フレドシト}国であって、それは公共の主権を流し去り、民主主義を犠牲にし、ボナパルト個人のうちに権威主義的な共和国の強化のみを求めたことによっています。

新聞は、少なくともフリュクチドル18日のクーデタまでは隆盛で完全に自由であり、1798年末以降に再びそうなりますが、そこにおける豊かな政治討論の様々なニュアンスを取り除けば、総裁政府のもとでは二つの共和国の概念が対置されていました。

一方では、制度的に攻撃不可能な共和国を創出したいという政治的配慮があったようです。そうすれば法律面、社会面で革命から受け継いだものが保障されるからです。リベラルで議会主義のシステムにおける社会的保守主義は、公共秩序の保持を基盤とし、共和制的功績主義によって保障されるものですが、それがこのブルジョワ的ともいえる選択肢となります。ただしその変種は、国家の権威主義から社会経済的な自由主義まで、多様であり得ます⁴⁵¹⁾。

第二の選択肢は、政治討論の場における左寄りの勢力から出てきます。この場合には共和国は、選挙権の拡大を通じる政治的民主主義化と社会的平等の拡大のプロセスとされます。それは、もっともつましい階層の教育と、団結権の保障、そしてとりわけ単なる市民が自分たちの委任者の政治活動をコントロールする可能性を通して実現されるべきものです。この型の共和国は、総裁政府期の左翼勢力によって考えられ、概念化された代表制民主主義の発見という新たな道の中に位置づけられるものですが、長い間、ユートピア的パプーフ主義やジャコバンの懷古趣味として戯画化されてきました⁵²⁾。

b 「過激中道派の共和国」：問題となっている討論

多くの歴史愛好家たちはいまだに総裁政府を、共和暦5年、6年、7年の強権発動の度に右や左に揺れ動き、状況に応じて二つの勢力の間で国家という船を揺らせていた体制であり、この共和主義の時期は制度を墮落させる御都合主義の前史であると考えています。しかしながら、総裁政府がぶつかりあう政治の犠牲であって、その政治は総裁政府を、フランスを救うために南フランスの海岸に上陸した若い将軍の手に委ねるべく、一直線に運んで行ったと考えるほど間違ったことはありません。この体制のプログラムと目標のすべては逆に、右でも左でもな

い新たな空間を設立しようとする断固とした意志をもって、中道の政治を打ち立てることだったのです。この体制の立案者、イデオログ、「知識人」が、政治文化を考え、政府のプログラムを定義するにあたって、それぞれにどのような役割を演じたかを理解するためには、この中道の政治、もしくは二つの異なる勢力と一線を画そうという強迫的な意志の点で「過激中道派」の政治を繰り返して強調する必要があります。この政治は、歴史家が調査できるような史料という点からは見分けがつけにくいのですが、3つの面からなっています。まず、この共和国は白色もしくは赤色のジャコバンを酷評し続けますが、それを支えている人物については、その過去を詮索したり、その立場を厳密に定義したりしようとしないうことで、それは共和暦3年に恐怖政治に関連する調査から得た教訓を生かしてのことです。ついで、この変節漢という姿勢ゆえに、政治の理論化はあまり行われず、むしろ論争の場における左右の勢力への反応が中心であることが説明されます。第三の面として、この中道の共和国は、立法権を見捨てるわけではないにしても、執行権が行なう政治と行政制度の強化に努力を集中することが指摘できます。パリの新聞は特に、政治的敵対関係の新たな布置を考える実験場となっていました。Le Journal de Paris 紙、L'Ami des Lois 紙、La Décade 紙や Conservateur 紙はいずれも総裁政府に近い組織で、様々な面から、この見分けがたくはあっても確かに存在していた中道の軌跡を追うことを可能にしてくれます。

総裁政府派は、政治のキャンバスを引き裂き、危うい均衡を絶えず失わせる恐れがある遠心的な力を絶えず非難しています。警察は、広範な要請に基づいて、ちょうど都合よく過激派が準備していた陰謀を摘発します。バブーフ派の陰謀で、その危険性は1796年春に誇張して操作されました。役人は地方において左右の無政府主義者に対する恐怖を引き継ぎ、党派的で暴力的とされたこれらの少数派の信用を絶えず失墜させようとしてしました。危険な急進性に向き合うように、穏和さを謳うレトリックが現れます。共和主義の真正さを標榜する哲学は「良識」と家長の秩序の慎重さ、あらゆる古代都市国家における共和主義的賢人の穏和さ、とりわけ利害の調和をめざす政治を要求するのです。

共和国の学者の機関紙である La Decade 紙においては、中道が決して明示的に定義されないままにほめかされ、そこに連帯する政治がかなりの紙面を占めています。「確実なのは、我々にとって、我々によって、我々の周囲で、すべてが変わったことである。我々の政治的存在は、理性を基盤とし、利害をこれからの保障とするのである⁵³⁾。」1796年、1797年、1798年には、右も左も持たない政治を建設する困難さは、執行権が共和国のために、より自律的でイデオロギー的偶発事からより解放された指導性を明確にしようとした際に、急変したように見えました。この政策を支えるものとして、共和主義的で中立で効果的な行政機能という思想が、非政治的で単に効果的であるのみの国家装置の建設をめざして、徐々に形成されたのです。共和暦8年ブリュメール10日、クーデタの一週間前に、この思想は La Decade 紙の記者の筆によって、代表者に選ばれるべき市民の枠組みを行政官が作ることの要求として示されます。この考察の著者は「区別なしにあらゆる市民から立法者を選ぶことができ、現に選ばれていて、公共の職務を担当したことがあるか否か、行政機構や法を執行することの困難さを知っているか否かは問題にならない」ことが不快なのです。記者は、反対に、「立法府の候補者には、政治と行政の学に通じていることの証明を求める」ように憲法の改正が必要であろうと付け加えます。そうすれば「民衆は、自分の真の利害に敏感であるから、自分たちの代表者を元行政官からしか選ばないであろうし、そうすれば議会に入った時に政治教育から始める必要はなくなるであろう」というわけです⁵⁴⁾。重要な変更点が表示されており、この変更はフランス共和国の長い政治史を、時として最悪なものに変えてしまいました。それは、共和国の国家理性が国民主権に根ざす体制の原理よりも優位に立った時です。技術的な知が、公共善と公共の幸福に仕える者の誠実さと義務にとって代わる時、知らず知らずのうちに、共和国の偏流の萌芽が見られるのです。19世紀と20世紀の歴史において、フランス・エリートの典型的な責任放棄が見られるのは、まさにこの点ではないでしょうか。脅かされた共和国が行政政府幹部を緊急に必要としている時に、自己の理想よりも公共の事柄を守ろうとする役人たちの一統から見捨てられるのです。1799

年、1815年、1851年、1940年がそうでしたし、それに1958年を付け加えるべきでしょうが、これら一連の出来事はまったく似てはいないものの、全て権力の座にあるエリートが引き受けた計算の結果なのであり、彼らは相異なるコンテキストにおいて、共和制の原則の擁護よりも国家理性の声の方を重視したのでした⁵⁵⁾。

中道の共和国、賛同者の共和国、政治的無気力の形式が持つパンドラの箱には、運命を担う人も入っています。中くらいの幸福と凡庸な変節漢の共和国は、それを償うかのように、公共の事柄を救う人も生み出すのです。政治や共和制は人物を必要とします。世論と選挙人の時代における思想の応酬はイメージを必要とします。統領政府は、すでにして近代的なこの規則を免れられませんでした。しかしながら、1795年から1799年の間の、多少とも意味のある結集の時代において、共和国は前例のないイメージ不足（これは現代の宣伝業者の用語ですが）に悩んでいました。もっともよい人、もっとも力強い人、もっとも目を見張らせられる人は、テルミドール10日を生き延びませんでしたので、統領政府を担う5人は、制度の頂点にありながら、共和国を体现できなかったのです。保守的な共和派は、この中道の共和国を代表し得る人物を緊急に必要としていました。その人物を思い起こすだけで自分たちの理想と、自分たちの共和国のプログラムに力を与えるような、そうしたリーダーを必要としていたのです。イタリア方面軍の野心的な指揮官、アルコール橋での輝かしい勝利者、エジプトの征服者が、彼らにこの機会を提供しました。彼らも、彼自身と同様に、また同じくらい効果的に、彼を「発明」し、彼に前例のないほどの厚みを与えたのです。ボナパルトはすぐれて中道の人物となりました。Le Journal de Paris 紙と Le Conservateur 紙は、この輝かしい將軍を共和国の救世主に、すなわち二つの区分の間に行き来できない区切りをつけることでフランス革命を終結させる救世主にすることに、おおいに貢献したのでです。「革命を閉じるのは、それを始めるよりも難しい⁵⁶⁾。」企ては、共和主義の宿命をボナパルトについてでっち上げることにありました。この企ては、文人、学者、高級官僚、代議士など、知識層全体によって知的に準備され、秩序、執行権の強化、今では「境界階層」と呼ばれることになった中産層の諸価値の支

持からなるプログラムを擁護しました。共和主義を確固たるものにするこの政策は、1797年以降には反民主主義を明らかにしていますが、一人の若者によって担われるべく練られました。共和主義者であることが保証付きであり、恐怖政治とテルミドールの政治階層からははっきり区別されるものの、強権を振るうことができ、過激中道派の理念に適っている、そういう若者です。この後は、統領制共和国の中庸の精神に国を合わせていくことが求められるのです⁵⁷⁾。La Decade紙は共和暦8年ジェルミナル20日に、「平等、自由、所有」の価値をめぐって、この若い将軍を支持しました。

c 反対側にある、代表制民主主義の前提

当初は共和主義者であった急進派、共和暦2年の革命の指導者たちは、反動（これは当時の用語です）の時期が来るとどうなったのでしょうか。彼らが単に、失敗に終わるバブーフ主義の袋小路に落ち込んだり、自らの政治的敗北から沈黙に陥ったりしたと考えるのは短絡的です。共和暦3年のジェルミナル、ついでプレリアル以降、確かに民衆運動はもはや動員されませんでした。しかしながら近年の研究は、総裁政府下での民主主義運動が、政治的実践の点においても、また代表制民主主義の理論と概念化の点においても、重要であったことを示しました。革命の開始以来、革命のエリートは、少数派ではあっても活動的で、自分たちの連合主義のテーマの公表に努めました。それは民衆もしくはその代表が国民投票を通じて執行権を排他的にコントロールすること、男子市民全員が政治生活に参加するという規則を厳しく適用すること、啓蒙主義の運動から引き継いだ人間の完成可能性という理念に従って、すべてのフランス人の社会的・政治的混交を促進すべく、民衆教育のプログラムを組み立てること、および結社の自由です。この共和主義的で民主主義的な運動に関して、フリュクティドール18日以前とそれ以後とを区別しなければなりません。かつて共和暦2年の政治に参加していた人の運動は、一時は地下活動をめざしましたが、共和暦5年、1797年春の選挙の結果、君主制復活の危機がフランスに現実のしかかっていることを意識して、はっき

りと合法活動に専念します。アルフォンス・オラルがまさに「民主主義的共和派」と呼ぶ人々は、共和暦3年の憲法を激しく批判しましたが、共和暦6年の選挙に参加することで立法権を平和的に獲得することをめざす政策プログラムを採用しようと決めました。彼らは、自分たちの政治化、組織、新聞に自信を持っていて、五百人会と元老院の両院が毎年三分の一ずつ改選される機会を捉えようとしたのです。総裁政府下の急進的左翼全体は、フリュクティドル18日のクーデタによって生まれた新しい条件の結果を受けて、自分たちにはアприオリに不利な憲法を尊重しながら民主主義の獲得を目指すという、それまでは矛盾とみなされていた二股活動を統合したのでした。民主主義の実践とエリート共和主義がこうして無理やり結び付けられた結果、「代表制民主主義」という概念の理論化が生まれるのです⁵⁸⁾。たとえばアントネルは、初代アルル市長にして立法議会議員、革命裁判所判事を歴任し、1797年9月からは *Journal des Hommes libres* 紙の主筆だったのですが、共和暦3年憲法を近代的民主主義の要請に適合させる計画を展開したのでした。彼は能動的な人のグループという表現を案出しました。これは後の世代には忘れられたのですが、1830年代の共和派世代はこの概念の実質を取り上げることになります。1795年にはあまりはっきりとは言いかねる表現だったのが、急進的左翼の一部にはより親しみのあるものとなったのです。アントネルは1797年からすでに、「立憲的民主主義」（彼が一時出していた壁新聞のタイトル）とは何であり得るかについて、長々と説明しており、それによって総裁政府下の急進的左翼の政治的な思想と実践の主要な転換点、19世紀の共和主義の戦いの祖先となりました。

急進的政治運動が生命力を示し、それによって政治の十全たる当事者となったのは、1799年夏のことです。1798年の憲法サークルの季節の後で、再生する政治クラブの原型となったマネージュ・クラブは、フェリックス・ルペルチエ・ド・サン＝ファルジョを通してプログラムを提出しました。彼は、国王処刑に賛成したために1793年1月20日に暗殺された公会議員の弟です。この提案はテルミドル18日（1799年8月5日）に作成され、*Journal des Hommes Libres* 紙に掲載さ

れました。その内容は、民主主義精神を復活させること、政治協会の自由を保障すること、憲法に反する法律をすべて撤回すること、平等で共通の教育を確立すること、祖国の防衛者に財産を与えること、乞食を根絶するために公共の仕事を開くこと、「買占め人」や軍需業者として共和国の金をむさぼった者を「吐き出させる」ための裁判所をつくること、ヨーロッパ共和国連邦を創設すること、総裁政府の政令から生まれる混乱を廃絶することです。7月から8月半ばまでの数週間、保守的共和派との同盟が模索されました⁵⁹⁾。しかしながら「名士たちは急速に、いくつかの提案の急進性に恐れを抱いた。というのもフランス軍は、バタヴィア（オランダ）共和国からエルヴェチア（スイス）共和国を経てイタリアの諸共和国まで、すべての前線で退却しており、第二次対仏同盟によって、いたる所で攻撃を受けていたからである。総裁への選出を目指してベルリンの大使職から戻ったシエイエスは、軍事的敗北と政治的急進化の時期において恐怖政治に戻る恐れがあるという名目で、これらの人々を失墜させるキャンペーンを行なった⁶⁰⁾。」民主主義者は、この政策が政治危機を軍事的に解決しようとするものであることを理解して反対し続け、共和国に関する自分たちの計画の基礎を説明しようとしてしました。ですから1799年夏には10年前と同じ問題が、異なる体制を根付けけるために措定されたのです。どうしたら人民主権の実効性と憲法の不可侵性をまとめて考えることができるだろうかという問題です。

代表制民主主義は人民主権に基づき、市民権の平等によって具体化されるものであって、毎年、第一次集会での投票によって実効化されます。この投票の結果が、政党間の通常の調整を行なわせるのです。選挙結果が明らかになると、立法府から政府が形成されて、立法府の統制を受けます。こうした条件のもとでは、執行府である総裁政府はもっぱら法を執行する当局とみなされ、法を適用するのがその目的であると考えられねばなりません。憲法に規定されたこうした制度的空間と並んで、自律的な政治界が樹立され、そこにおいては政党（この語は初めて明確に用いられ、主張されます）が、選挙民にプログラムを指し示すことで、合法的に権力を得ようと試みます。そしてそれは、団結権と自由に表現する権利

によって守られなければならないのです。もし法が市民の自由に抵触する時に、国民投票から陳情にいたるまで、もしくは立法府への請願などの手段を通じて、市民が立法府に介入する可能性を持つのは、この政治界によってのことなのです⁶¹⁾。こうした論理の最後に、臣下の自由、法および憲法を同じように保障するのが問題となるのですが、「人が法を心に刻まない限り、公共精神が死の無気力に打たれている時に、どうやったら法をより強くできるだろうか⁶²⁾。」公共精神に準拠するというのは、自らの権利を自覚し、それを擁護しようとする市民の集合体である市民界が政治化するということですが、それは、教育が共和主義的な倫理を分かち持ち、それを目指す時にのみ考え得る合法性を持った「フランス人の普遍性」を氣にかけることでもあります。1799年夏にはあらゆる共和主義的民主主義者が、中道の保守主義者とは対照的に、民衆協会の存在を保障するように絶えず要求を繰り返しましたが、それは、対立の緊張から生まれる諸勢力の均衡を保障する政治空間を改善しようとする配慮だったのです⁶³⁾。近代の民主主義においては、政党の存在と反対派の必然性が政治的自由の保障となるはずです。選挙による定期的な刷新の動きは、立法府が執行府を委託する勢力の交代を保障し、全体の均衡を強化するのです。ここに、共和主義的民主主義者の活動がもたらした貢献があるのであって、この活動を、単に理論的な考察であって、そのために活動が明らかに弱体化したという視点から考察すべきではなく、むしろ、共和暦6年と7年の選挙に勝利するにあたって、民主主義的な共和派にとって効果的な選挙網を構成するのに役立った政治実践の具体的な成果として考察すべきなのです。とはいえ、シエイエスと保守的共和派による攻撃が効果を現し、1799年夏の民主主義的・共和主義的な実験はあっさり終わったのだということにも、注目すべきでしょう。

d 姉妹共和国の分野、革命は最初の政治的グローバリゼーションか？

一つの危機が、新たな建設を絶えず脅かしていました。総裁政府が対外政策をも不当に自らのものにしたことです。執行府は戦争を立法権に諮らずに「独占」

し、自らのものとししました。アントネルは共和暦7年ヴァンデミエールに「私たちが支えている戦争は、もはや民衆と自由にとって有利な戦争ではなく、抑圧的で貪欲な政策による計算のために、強奪的な略奪行為に変質したように見え」、「我々自身と我々が最近解放した国民とに対して、諸国民を鍛え上げる」ことにしか役立っていないと述べています⁶⁴⁾。ブリュメールには、言明はさらに厳しくなります。「ヨーロッパが偉大な国民と名付けたものは、その政治的権利と行使と市民的権利の享受という二重の関係で突如として消滅し、盗人、人殺し、陰謀家と裏切り者の一団に席を譲ってしまった⁶⁵⁾。」

ですから、民主主義的な共和派運動の究極の貢献は、諸国民の連邦によるヨーロッパ・レヴェルでの共和国の建設を求める客観的な声を見出そうという意志にあるわけでした、これは、偉大な国民の將軍たちが姉妹共和国に持ち込んだ略奪政策の対極にあるものでした。実際、1799年夏に民主主義政党の始まりであるマネージュ・クラブが形成された頃、諸県の憲法サークルが、国民の中の活動的な諸勢力の「総同盟」を形成する意志を表明していました。いくつかの団体は新たな連盟際、国民統合の祭りを要求しましたし、いくつかは、さらに、あまりにも総裁政府の言いなりになっている姉妹共和国を連合させることすら提案しました。ヨーロッパ・レヴェルで新たな政治経験の基盤を再建しなければならなかったのです。Journal des Hommes libres 紙はこの視点を絶えず展開させていました。共和暦7年メシドール12日（1799年6月30日）にヨーロッパのあらゆる国民に向けた呼びかけがなされました。「あらゆる国の自由な人々よ、スイス、イタリア、オランダの共和主義者たち、それから不幸なアイルランドの諸君、諸君の災難について我々を批判するのは控えてほしい。（中略）暴君や泥棒どもが諸君のところまで達したのは、我々を打倒したからのことであり、我々の遺体を担いでのことなのだ。」この1799年夏には、フランス共和国と平等な共和国から成るヨーロッパ統合を創出しようという、独創的で明確な計画が存在したのです。ヨーロッパ的な代表制民主主義でしょうか。これらの共和主義者のうちの何人かは、それを考えていました。例えばバレールであって、彼は国内流刑の中で、ヨーロ

ッパ共和政府の素案を提起していたのです。「この大陸は、18世紀の啓蒙主義によって至る所で開明的であり、イギリス政府の犯罪に憤慨させられているのだから、いつの日か、中央に招集され、各国民、国家、権力、政府が代表を送る大ヨーロッパ議会によって準備される法令に従うことにならないだろうか。現在、神聖ローマ帝国の議会やフランスの議会があるように、ヨーロッパ代表議会が出現しないだろうか⁶⁶⁾。」ブリュメールのクーデタの前夜にあつて、共和主義者たちは明晰であり、解決策はもはや国民単位ではないことを理解していたのです。もっとも洞察力に富んだ人々は、国民国家の枠組みは代表制民主主義の理想や原則を妨げるだけであることを理解していました。その場合、代表制民主主義は二つのものに対する代案と捉えられていたのであつて、その二つとは、まず第一に、古い君主制外交のシステムによって押し付けられていた、ほぼ永続的な戦争状態であり、第二には、イギリスが海洋性国家のかたちで、18世紀末にすでにヨーロッパや植民地化された他の大陸に押し付けていた、リベラルなグローバリゼーションによる物や人間の搾取です。これはそのまま、民主主義的な共和主義者が次の世紀に担うことになる膨大なプログラムの縮図なのです。

今や、フランス革命を単なるフランスだけの出来事として捉えるのではなく、特殊ではあつても、他のモデルや他の革命と常に相互作用を持っていた出来事として捉えようとする重要な分野が開かれています。ソルボンヌで「鏡に映った共和国」というコロックが開催され、フランスの政治モデルが軍隊や文芸共和国によって1792年以降、とりわけ姉妹共和国が設立された1795年以降に伝播したことを問題としたのは、以上のような展望に基づくのです。

ロバート・パルマーとジャック・ゴドショが1955年に、1776年から1789年まで続く一連の断絶を理解するために、「大西洋革命」という概念を提起したことを思い出すべきでしょう⁶⁷⁾。

この点から見ますと、その直後に出版されたジャック・ゴドショの『偉大な国民』という著作は、新しいものであると同時に、古典的解釈の枠組みを確認するものでもありました⁶⁸⁾。新しい点は、革命のヨーロッパ化を、共和国の拡大とい

うソレルの視点から、大惨事という現実の事態としてみるのではなく、ヨーロッパが共和国の創出として、共和暦3年の憲法から輸出や適用が可能な体制としてみる、新たな読解です。報道やクラブ、愛国者、制度などを比較するという独創的な研究によってジャック・ゴドショは、一時期のヨーロッパは、フランス的であれ反フランス的であれ、1789年の爆発とその軍事的諸結果によって広範に構造づけられており、共和国3年憲法の元のテキストを地域の現実に応じて適応させることで組織された政府が作られていたことを示唆したのです。そこから著者は、輸出されたモデルは、その混乱や不当な徴税、暴力などにもかかわらず、詩人シェニエの言う「征服に慣れた偉大な国民」という語に比すことができると結論したのです。この著作は、主張内容の強さから見れば当然のことですが、多くの反響を引き起こし、1968年にはブリュッセルでコロックが開かれました。そしてこのように肯定的に見られた拡張の現実が批判され、占領の暴力が逆に明るみに出されたのです。フランス軍は略奪、凌辱、窃盗をして革命の理想に背き、政治の冒険をヨーロッパ規模での大々的なゆすりに変えたのであり、軍服を着た強奪者となった兵士たちの略奪をパリは擁護していたと主張されました⁶⁹⁾。

200周年からの研究分野によって新たに開かれた道の国際化は、総裁政府に関する新たな研究をもたらしています。一連のコロックが開かれ、より広範で大きく若返った歴史家グループが総裁政府期に目を向けているのです⁷⁰⁾。

「鏡に映った共和国。大西洋革命における総裁政府。新生共和国の対立、モデル化、相互作用」というコロックの準備委員会が望んだのは、まさにこの流れと革新の中に位置を占めることでした。共和国モデルが相互に交差すること、総裁政府の4年間に人や共和思想が交流することが、これからの問題となるのです。

ですから、総裁政府はあの「偉大な国民」ではなく、むしろ異なる状況に応じて対応する共和主義の実験場なのでしょう。オランダやイタリアでの現在の活発な研究は、フランス・モデルに魅了されたり、軍のくびきに苦しめられたりした国ばかりではなく、共和主義モデルについての考察がはっきりと行なわれた国や、地域的愛国者の自律能力が、彼らの計画、表現の自由、フランスとの協働もしく

はフランスへの敵対のための動員などに示される国もあったことを示しています⁷¹⁾。

フランス人を前にしたヨーロッパ人の考察は旧大陸を超えて、フランス共和国のニュースに飢えているアメリカにまで伝わりました。総裁政府の植民地政策は、奴隷制廃止を維持し、平等への配慮から、例えばアンティユ諸島に対して県の枠組みを提案したりしました。これは、確かに成功はしませんでした、宗主国と植民地の関係の正常化の枠組みにはなり得るものでした。しかし地域の現実と北アメリカからの圧力がすべてを無にしたのです。

南アメリカも忘れてはなりません。ここはスペイン王国流の「姉妹共和国」ですが、1789年に生まれ1795年に再確認された普遍的・制度的諸概念によって、植民地権力にとっては破滅的となるような、意識のめざめを経験しています。

総裁政府を受け入れる様式と、その流動性についてのこうした新しいタイプの問題設定は、パリとパリが動員した軍隊からではなく、受容される場から問題を捉えるのですが、共和主義の思想と政府が待望されたり、採用されたり、受容されたり拒否されたりしたと思われている点についての研究の展望を変化させるものです。

政治界の交流、翻案、相互交差、混合および再構成について、よりニュアンスに富んだ見方が現れ、この時代にこれまでとは別の光を投げかけています。

フランスとヨーロッパ、共和国と王国という二分法はそれほど適切ではなくなり、現実と外交問題について別の理解の仕方に席を譲っています。国境線の移動や制度的な断絶をそれほど重視せず、むしろこれまでのフランス寄り、ないしは反フランス的な研究史では長い間過小評価されてきた、これまでとは別の現実主義的政治を見ようとするようになっているのです。

これまでは相対立していた用語の組み合わせが研究発表に登場するようになっており、異なる空間が結びついたり、政治的転覆によって新たに結ばれたりする政治関係をより適切に再定式化しようとしています。少なくとも4つの組み合わせが、総裁政府下の共和制の問題を読み解く新たなやり方を提案していると思わ

れます。

総裁政府は現代共和国の二つの道を鋭く指し示しましたが、この体制がドラマチックに終焉したために、この点の研究が困難になっていました。しかしながら共和国はずっと分裂し、引き裂かれていたのであって、その一方には、集団的で匿名的な表現を構築しようという試みがあって、これが共和主義的な民主主義者を動かしており、彼らは立法府が採択した法律が市民的な政治生活の全体を動かすものだと考えていました。他方には「過激中道派」の共和国の概念があって、無政府主義の危険と考えられるものに対抗するために、ブリュメール18日のクーデタを引き受け、執行権の機能を超個人化させてボナパルト将軍に体现させ、執行権をコントロールするのがよい共和国の特性だと信じていました。200年後のフランスは、共和制に関するこの誤解から抜け出したのでしょうか。一方には秩序の共和国を党派の上に置き、強権を持つ者を共和暦3年の言葉で言う「名士」の保護者として彼に共和国を体现させようとする人々がおり、他方には共和主義的民主主義を擁護して、体制の活力をその大統領よりもむしろ、連帯した市民が国家の生き方に参加する可能性の方に見出そうとする人々がおります。両者の亀裂は、消滅しそうありません。熱い歴史の対象であり続けるのは、革命ではなく、共和国なのです。

研究分野は多様であり、ここで言及したものよりもずっと多くあります。技術史（遠隔通信に関する瓜生教授の研究⁷²⁾を思い起こしましょう）、フランス国内や国際間での学者のネットワーク、外交史の新たな研究、新聞の歴史、芸術史、軍事史と軍の政治的役割の歴史、大西洋の諸革命の歴史、植民地住民の解放と奴隷制廃止の歴史、革命下の女性史、新たな支配関係から生じる、新たな正統性の容認としての公共秩序の歴史などが、ここでは触れなかった豊かな研究分野であり、常に豊かな解釈と現在を理解するのに示唆をもたらす、革命の時代の活力を示すものです。この研究分野がフランスと日本の研究者を近づけ続けますように。

注

- 1) Kohachiro Takahashi, Georges Lefebvre et les historiens japonais, in *Hommage à Georges Lefebvre, 1874-1959*, Sociétés des Etudes robespierristes, Nancy, 1960, pp.117-125
- 2) Y. Higuchi, « Les quatre « quatre vingt neuf », ou la signification profonde de la révolution française pour le développement de constitutionalisme d'origine occidentale dans le monde », H. Nakagawa, « l'image de la Révolution dans le roman : le nouveau diable boiteux, tableau de Paris en 1797 ». Michio Shibata, Tadami Chizuka, « The image of the french revolution in Japanese historical sciences » et Nagao Nishikawa "Some reflexions on Japanese historiography of the French revolution, the nation state and its ideology" in *L'image de la Révolution française, Congrès du bicentenaire*, Londres-Paris, Pergamon Press,
- 3) K.Yamazaki, « Les éloges de Montesquieu par Barère », Study Series, n°18, Center for Historical Science Literature, Hitotsubashi University, march 1989, 49 pages
- 4) *Annales historiques de la Révolution française*, 2003, no.2, pp.101-128
- 5) M.Takahashi, « François Boissel et ses principes d'égalité en 1789 » (Tokyo, Chuo université, 1983)
- 6) Roger Chartier, *Les Origines culturelles de la Révolution française*, Paris, Seuil, 1990 (松浦義弘訳『フランス革命の文化的起源』, 岩波書店, 1994年)
- 7) この点に関してはロバート・ダーントンの業績, とりわけ百科全書と1750-1770年代の読者への普及の成功に関するもの, および1770-1790年代における, より一層破壊的な文化の発見の重要性を指摘しなければならない。Robert Darnton *Édition et sédition, Bohème littéraire et révolution le monde des livres au XVIIIe siècle*. Paris, EHESS, 1983
- 8) 1783年にジョージ・ワシントンによって設立された, アメリカ最初の愛国協会。フランスにもその支部会が設立された。
- 9) Cf. Dale Van Kley, *Les Origines religieuses de la Révolution française*, Paris, Seuil, 1996.
- 10) Cf. Sarah Maza, *Vies privées. Affaires publiques. Les Causes célèbres de la France pré-révolutionnaire*, Fayard, Paris, 1997.
- 11) Paolo Viola, *Il Crollo del Antico Régime*, Donzelli Editore, Roma, 1993.
- 12) Philippe Gateau, *Les Cahiers de Doléances, une relecture culturelle*, P.U.R, Rennes, 2001.
- 13) John Markoff, *The Abolition of Feudalism, Peasants, Lords and Legislators in the french Revolution*, Pennsylvania, University Park, 1996. Gilbert Shapiro et John Markoff, *Revolutionary Demands. A content Analysis of the Cahiers de Doléances, of 1789*, Stanford, 1998
- 14) Cf. Timothy Tackett, *Par la Volonté du Peuple. Comment les Députés de 1789 sont devenus révolutionnaires*, 1996, Paris, Albin Michel, 1997
- 15) Cf. C. Lucas « Nobles, Bourgeois, and the Origins of the french Revolution », in *Past and Present*, n°60, 1973
- 16) François Furet, *Penser la Révolution*, Paris NRF, 1977 (大津真作訳『フランス革命を考える』, 岩波書店, 1989年)

- 17) Jean-Clément Martin, *Violence et révolution essai sur la naissance d'un mythe national*, Paris, le Seuil, 2006
- 18) Jean Nicolas, *La Rébellion Française, 1669-1789*, Paris Seuil 2005
- 19) Voir Marc Belissa, *Fraternité universelle et intérêt national (1713-1795)*, Paris, Kimé, 1998.
- 20) Roland Mortier, *Anacharsis Cloots ou l'utopie foudroyée*, Paris, Stock, 1995, « l'ambassadeur du genre humain » p.125-138.
- 21) René Moulinas, *Histoire de la révolution d'Avignon*, Aubanel, 1986
- 22) もちろん、まったく別の読解もありうるし、あるべきである。アルノ・メイヤーは革命の比較史を試みる中で、革命のプロセスが始まるや否や、まだ急進化もしないうちに、それと戦おうという反革命の側からの激しい意思が示されるのであって、その点を組み入れなければ革命戦争は理解できないことを示している。この点で彼は革命に批判的な歴史学と根本的に分かれるのである。Cf. Arno Mayer, *Furies, violence, vengeance, terreur, au temps de la Révolution française et de la révolution russe*, Paris, Fayard, 2002
- 23) フランク・アタル (Frank Attar, 1792. *La Révolution française déclare la Guerre à l'Europe*, Bruxelles Complexe, 1992) は研究の視野を1792年におけるフランスの攻撃的な有罪さに限定している。むしろ、共和国(オランダ, アメリカ合衆国, フランス)の誕生と戦争の因果性の出現との間の存在論できなつながりを考察した方が、より気が利いていたであろう。もしくは18世紀後半のヨーロッパにおいて、文化の変容と愛国的・国民的文化の容認が革命戦争のような暴力行為への移行を推し進めた点の研究である。デヴィッド・ベルはまさにこの点を解明している。David Bell in *The Cult of the Nation : inventing Nationalism, 1680-1800*, Cambridge, Harvard University Press, 2001.
- 24) ブリソとアメリカ革命の関係については Clavière, Etienne, et Brissot (dit de Warville), Jacques Pierre, *De la France et des Etats-Unis d'Amérique ou de l'importance de la Révolution d'Amérique pour le bonheur de la France, des rapports de ce royaume et des Etats - Unis d'Amérique, des avantages réciproques qu'ils peuvent retirer de leurs liaisons de commerce , et enfin de la situation actuelle des Etats-Unis d'Amérique*. Préface de Marcel Dorigny, Cths 1996および Brissot de Warville, *Nouveau voyage dans les Etats-Unis de l'Amérique septentrionale en 1788, 1791*. を参照。
- 25) Bernard Vincent, *Thomas Paine ou la religion de la liberté*, Paris Aubier, 1987. 参照。著者は1776年の『コモン・センス』の出版が、共和制を選ぶことと武器を取ることが相互に影響しあう状況を作り出すことで、いかに新たな急進化をもたらしたかを示している。「1776年のイギリス領アメリカで、『共和派』の語は多くの人にとって侮辱であった。『コモン・センス』がなにかメリットをもたらしたとすれば、それは『共和国』という概念を再生させたことであることは間違えない」(p.70)
- 26) Haim Burstin, *Une révolution à l'œuvre, le faubourg Saint-Marcel, 1789-1794*, Seyssel, Champs Vallon, 2005. p397-398.
- 27) 最近の、こういう呼び方ができるなら「スキナー的」なやり方は、前自由主義的ないし反自

- 由主義的な古典的共和制における道徳的な徳を称揚するが、古典的共和国と戦争のつながりを真剣に考えるのにはあまり貢献しなかった。サン＝ピエールとカントの思想から発する考え方が、新しく戦争のない近代的な共和主義の条件を創出するが、その歴史はまだ描かれていない。Quentin Skinner, *La liberté avant le libéralisme*, Paris Seuil, 2000, (1997, 1ère ed.). 参照。
- 28) Site électronique Institut d'histoire de la Révolution française, Controverses.
- 29) Dominique Julia, *La Révolution : les trois couleurs du tableau noir*, Paris, Belin, 1981. 参照
- 30) Robert Palmer, *Twelve who Ruled : the Year of the Terror in the French Revolution*, Princeton, University Press, 1941. (1989 pour la trad. Française).
- 31) テルミドールの政治の解釈としては Françoise Brunel, *Thermidor* Editions Complexe, Bruxelles, 1989を参照。
- 32) Baczko, Bronislaw, *Comment sortir de la Terreur*, Paris, nrf, 1989 p.76-78.
- 33) Ibid., p.138.
- 34) Ibid., p.157.
- 35) Sergio Luzzatto, *L'automne de la Révolution, luttes et cultures politiques dans la France Thermidorienne*, Paris, Champion, 2000 (1ère ed. 1994). 参照。
- 36) S. Luzzatto, *L'Automne...* op. cit., p.343.
- 37) Cité par Sergio Luzzatto, pp.70-72 ; voir J. Lebon, *A la Convention nationale. Lettres justificatives*, Paris, an III, p.7.
- 38) 歴史家 (1877-1963)。歴史教科書を執筆。ユダヤ系で反ナチズムの闘士であったが、妻と娘は捕えられ、アウシュビッツで処刑された。
- 39) Cf. Dupont de Nemours, *Plaidoyer de Lysias contre les Membres des anciens Comités du Salut public et de Sécurité générale*, Paris, an III.
- 40) Moïse Bayle, *Au Peuple souverain et à la Convention nationale*, Paris, An III
- 41) 共和暦4年ブリュメール4日に公会は「フランス革命に特に関するものごと」に対する全般的赦免を採択した。亡命貴族、流刑者、ヴァンデミエールの事件の被告、および賈金造りは除外された。
- 42) Roland Moisan (1907-1987) フランスの挿画家。1956年以降は *Canard enchaîné* 紙の挿画を担当し、次注の書物の挿画でも知られる。
- 43) André Ribaud. *Le Roi, chronique de la Cour. Dessins de Moisan*, Paris, R. Julliard, 1962
- 44) Patrick Rambaud, *Deuxième chronique du règne de Nicolas Ier*, [Paris] : le Grand livre du mois, 2008
- 45) サド侯爵 (1740-1814) が1795年に発表した『閨房の哲学』*La philosophie dans le boudoir*において、自己の政治哲学を述べるために政治パンフレットの形で挿入した「フランス人よ、共和主義者たらんとしたら、あと一歩の努力を」*Français, encore un effort si vous voulez être républicains*を指す。
- 46) Cf. Claude Nicolet, *L'idée républicaine en France. Essai d'histoire critique*, Paris, Gallimard, 1982.

- 47) Cf. Dominique Margairaz, *François de Neufchâteau, biographie intellectuelle*, Publications de la Sorbonne, Paris, 2005
- 48) 共和暦3年憲法「第2編 市民の政治状態」in *Les constitutions de la France* présentées par Jacques Godechot, Paris, Garnier Flammarion, p105.
- 49) Roger Dupuy, *La Politique du Peuple, XVIII^{ème}-XX^{ème} siècles. Racines, Permanences et Ambiguïtés du Populisme*, Paris, Albin Michel, 2002, et Sergio Luzzatto, *L'automne de la Révolution*, op. cit.
- 50) James Livesey, *Making Democracy in the French Revolution*, Cambridge, Harvard University Press, 2001
- 51) Andrew Jainchill, *Politics after the Terror. The republicain origins of French liberalism*, Cornell University Press, Ithaca and London, 2009
- 52) Cf. Isser Woloch, *Jacobin Legacy. The Jacobin Movement under the Directory*, Princeton University Press, 1970.
- 53) « Considérations sur la situation intérieure de la France », lettre de L. Bienvenue in *La Décade philosophique littéraire et politique*, par une société de gens de lettres, 20 thermidor an V (7 août 1797), p.311-320.
- 54) *La Décade*, op. cit. n° 4, 10 brumaire an VIII, p.249.
- 55) Brigitte Gatti, *De Gaulle prophète de la cinquième république, 1946-1962*, Paris, Presses de Sciences-Po, 1998
- 56) *Le Journal de Paris*, n° 223, 13 floréal an V, p.900.
- 57) この著しく反民主主義的なクーデタの共和主義的な根源の中には、権威主義的で著しく自由を侵害する現代の共和体制、Zeev Stenhell が研究した、あの地中海性ファシズムの母型が見られないだろうか。Cf. *Ni droite ni gauche, l'idéologie fasciste en France*, Bruxelles, Complexes, 1987.
- 58) Pierre Serna, *Antonelle, Aristocrate révolutionnaire, 1747-1817*, Paris, Le Félin, 1997, p.289-297.
- 59) Bernard Gainot, 1799, *Un nouveau jacobinisme*, Paris, CTHS, 2001.
- 60) Marcel Gauchet, *La Révolution des Pouvoirs. La Souveraineté, le Peuple et la Représentation, 1789-1799*, Paris, N.R.F., 1995 Chap. III « Brumaire ».
- 61) Antonelle, *La Constitution et les Principes. Opposés aux floréalistes*, sans date, s.e., p.2.
- 62) *Journal des Hommes libres* n° 48, 18 thermidor An VII (5 août 1799), p.199.
- 63) Ibid. n° 11, 11 messidor An VII (29 juin 1799), p.44.
- 64) *Le Journal des Hommes Libres*. n° 34, 15 vendémiaire An VII (6 octobre 1798).
- 65) Ibid. n° 1, 5 brumaire An VII (26 octobre 1798), p.4.
- 66) Barère, *De la liberté des mers*. Sd. Sl. An VI, Livre V, chap. XXV, Tome II, p.287-297.
- 67) Robert PALMER, Jacques GODECHOT, "Le problème de l'Atlantique", *Comitato internazionale di scienze storiche, Xe Congresso internazionale*, Roma, vol. V.175-239 (1955).

- 68) Jacques GODECHOT, *La Grande Nation*, Paris Aubier, 1956.
- 69) *Occupants Occupés 1792-1815. Actes du Colloque de Bruxelles du 29 et 30 janvier 1968*. Bruxelles, ULB,
- 70) Philippe BOURDIN et Gérard LOUBINOX (dir.) *Les Arts de la scène et la Révolution Française*, Clermont-Ferrand, Presses Universitaires Blaise-Pascal, 2004 ; Antonio DE FRANCESCO (dir) *Esperienza e memoria del 1799 in Europa*, Milan, Guerini e Associati, 2003, および Lille, Rouen, Valenciennes の各大学によって開催された一連のコロック。Jean-Pierre JESSENNE (ed.) *Du Directoire au Consulat 3. Brumaire dans l'histoire du lien politique de l'Etat-Nation*, Lille-Rouen, CRHEN-O, GRHIS, 2001 ; Hervé LEUWERS (ed.) *Du Directoire au Consulat. 2. L'intégration des citoyens dans la grande nation*, Lille CRHEN-O, 2000. 参照
- 71) Antonio DE FRANCESCO, 1799, *Una storia d'Italia*, Milan, Guerini e associati, 2004 et Annie JOURDAN, *La Révolution batave-Entre la France et l'Amérique (1795-1806)*, Rennes, PUR, 2008
- 72) 瓜生洋一, 「信号機と暗号——フランス革命期のテレコミュニケーション」, 『ことばと社会』(4) pp. 6~23, 2000三元社

訳者解説

本稿の著者ピエール・セルナ (Pierre Serna) 氏はパリ第一大学でフランス革命史講座を担当する教授、1963年のお生まれだから、現在46歳である。同教授のこれまでの研究は、2つの分野で展開されてきた。ひとつはアンシアン＝レジーム期の貴族に関するもので、貴族の啓蒙思想への関わりや、貴族と暴力を問題とし、決闘や政治的論争を研究対象としたものである。もう一つはフランス革命期の政治思想と政治的な実践や態度に関するもので、一方では左右の過激派の組織や言説を、他方では逆に対立を穏和化し、プラグマティックに国家理性を追求する勢力の言説を扱っている。主要著作としては、① *Antonelle, Aristocrate Révolutionnaire-1747-1817*, Préface de Michel Vovelle, Editions du Félin, Paris, 1997, ② *Croiser le fer, Culture et Violence de l'Épée dans la France moderne (XVIème-XVIIIème Siècles)*, Editions Champ Vallon, en collaboration avec Pascal Briost et Hervé Drévilion, 2002 ③ *La République des Girouettes-1795-1815 et au delà / une anomalie politique? : la France de l'extrême centre*, Seyssel, Cham Vallon, 2005がある。最近は、18世紀の都市における動物の位置とその政治的意味合い(動物を用いた比喩やカリカチュアなど)、および大西洋革命や姉妹共和国における共和制の問題にも関心を注いでいるようである。

セルナ教授は2009年9月下旬に中央大学の招きで来日したが、その折り、9月26日(土)に、訳者が世話役をしている「フランス革命研究会」が専修大学と共催した研究会＝講演会で講演した。余談ながら、教授は20年以上前から剣道に親しんでいて、現在は2段の腕前であり、かつては剣道の修行のために九州に滞在した経験もお持ちである。今回の講演でも剣道を例に引いた話を挿入されたほか、中央大学剣道部の練習に参加したり、東京で籠手を入手したりされた。また講演に先立って専修大学図書館が所蔵するミシェル＝ベルンシュタイン文庫を見学していただいた。フランス国立図書館にもない史料を書庫で直接に手にとって見て、深く興味を示されていた。さて講演に関しては、訳者があらかじめ、最近20年ほ

どのフランス革命研究の状況を取り上げてほしいこと、講演の訳稿を『歴史評論』誌に掲載させてほしいことの2点を伝えておいたので、それらを考慮した原稿を前もって送ってくれた。それが本稿である。見てわかるとおり、講演の原稿としては長大過ぎるものだが、出版を念頭に置いて詳しく記したものであり、実際の講演はこの原稿を抜粋しながら行なうとのことであった。しかしながら実際に講演を始めると、原稿を離れて自分の言葉で生き生きと語り出したため、講演での話は本稿とかなり異なるものとなった。その快活な語り口を埋もれさせてしまうのも惜しいので、『歴史評論』の718号（2010年2月号）には、講演の録音を起こしたものを掲載し、それとは別に、本稿は抜粋せずに、全文を公刊することにしたものである。この点に関しては、帰国後の教授から「講演の原稿と録音をどのような形で刊行するかは、訳者に一任する」との許可をいただいた。

本稿の内容については、読者自身が本文をお読みになれば理解できることなので、わざわざ解説は付け加えない。革命200周年後の20年間の主要な研究と、セルナ教授自身の問題関心の双方が丁寧に解説されており、注に挙げられた豊富な文献とともに、日本の研究者にとって、一種のガイドブックとして役立つとともに、問題関心を刺激されるところも大きいと思われる。ただ1点のみ、注釈を付しておこう。本文中にある「過激中道派」は *extrême centre* の訳語で、これはセルナ教授が提唱する新しい概念である。*extrême* と *centre* は水と油のように相反する印象を受けるので、研究会の折りに個人的に質問したところ、「フランス語の *extrême* には『極端な』『度を越した』という意味もあるが、それとともに『一つの立場に固執し、その立場を守るためなら暴力も含むいかなる手段を取ることも辞さない』という意味もあって、自分はその意味でこの語を用いた」とのことであった。総裁政府期に、ジャコバン派の残党と王党派の双方をクーデタや議員資格の否認などの手段で弾圧しながら、中道路線を守ろうとした人々（とその政治思想）を指して作られた概念であるが、「過激中道派」はフランス革命期のみにとどまらず、現在に至るまでフランス政治を特徴づける一つの流れとして存在し続けているというのが、セルナ教授の見解である。

なお、9月26日の研究会＝講演会（日本私立学校振興・共済事業団、平成21年度学術振興資金「『ミシェル＝ベルンシュタイン文庫』の史料学的研究」＜専修大学＞との共催）を開催するにあたっては、大東文化大学の瓜生洋一教授が仲介の労を取ってくださった。また専修大学の近江吉明教授は講演会場の準備、『歴史評論』誌の編集、および本稿の刊行のすべてにわたって中心となってお骨折りくださった。中央大学の三浦信孝教授は、研究会の開催にご配慮・ご協力をくださった。記して謝意を表したい。